

→
空気が重い。

倒れる影丸たちの体を潰すかのように、脳天から足先まで見えない何かが乗っているようだ。
一糸纏わぬ姿で引き締まった肉体は汗に滲み、近づく覚醒の時の為に脈動を強くしていく。

暫くすると、大きな背中と豊満な尻を出して仰向けに倒れた影丸の体が、徐々に動きを取り戻す。
上半身を起こし、目蓋を重そうに開く。

気付くとそこは長く続く廊下の端だった。周囲を見渡しても長く続く廊下の果ては薄暗く、何も見えない。

一応窓は開けられてはいるが、外は得体の知れない黒い霧に包まれている。しかし、廊下は不自然なほどに明るく、逆に不気味さを増している。

「く……っ、不覚。魔剣ならば迷宮を作り出すのも容易だった筈……。この妖気は、不味いでござるな……」

ふと己の持ち物を確認するが、何時の間にか影丸が入手した道具は全て無くなっていた。
頭巾を除いて、一糸纏わぬ姿で筋肉と魔羅を露出していた。

……起き上がる時に魔羅と床を擦り合わせてしまい、思わず感じて射精を少ししてしまったのを隠すようにゆっくり立ち上がる。

慌てた様子で周囲を見渡すと、共に魔剣を入手した相棒が何も身に纏っていない姿で倒れていた。

「あれは……!? おい、しっかりしろ!」

慌てながら駆け寄り、意識を失っている相棒の体を揺する。

魔羅

- ・鷹助が相棒…2
- ・七兵衛が相棒…9
- ・鬼が相棒…5
- ・烏天狗が相棒…8
- ・坊主が相棒…50
- ・狼が相棒…51



し、師匠！お怪我はなっていた。穢れを知り、対照的に筋肉は興奮影丸の顔を不安そうに、この慌てぶりを見て、で、しよ、承知！」

いたのか、若干嬉しそうな強くなっていた。

！！

を押し退けて影丸の唇

する鷹助の姿勢に心揺る絡み付き、ゆつくり、剥き出しの厚い胸板、尻を愛撫しながら自身走り、濡れた裏筋同士

っんふっんんんおぶるじゅぐじゅぐじゅずぞっ！んっんっんっ！もぶおぶんぶじゅ

は同時に射精した。絡たせた。

早く、先に進むぞ。こよ、承知、です。師匠

思魔羅の迷宮

影丸が扉の前から去ろうとした瞬間、背後から鬼が我が物顔で前に出てくる。馬鹿にしたような口調で話し出すと、確認するように扉を軽く叩く。

軽くと言っても鬼の腕力から繰り出される衝撃は強く、唸るように扉がしなる。

「んだあ？こんな扉、妖術なんて関係ねえぜ！！オレの腕っ節で一発だっ！下がってな、相棒」

鬼は拳を強く握り上腕筋に血管を浮かび上がらせると、勢いを付けるように腕を派手に振り回す。そのまま半歩下がって扉から離れると、回した腕の勢いを体重ごと叩きつける様に殴り掛かった。鼓膜を揺るがすような轟音と震動が周囲に広がると、扉は轟音と共に一気に木片となって砕け散った。

木片と砂埃が収まると、そこには豪快に開いた道が続いていた。

「ん？イマイチだったな。最近城に籠ってばかりだし、偶には里に帰って……」

「と、とにかく扉は開いたのだな。先へ進むぞ」

「ん、ああそうだったな。さっさと突撃すんぞ！」

・中に入ろ…17

黒魔羅の迷宮

廊下の先には広い異国情緒溢れる書庫があった。和風な物から大陸風な物まで多くの本棚や書物が乱雑に保管されている。

特に背の高い本棚が壁のような圧迫感を与えながら立ち並び、それに乗じてか天井がかなり高い。収蔵された書物はいずれも厚い埃にまみれ、強い黴臭さを漂わせていた。

しかし、見渡す限りの本棚のみが連なっており、蔵書も相当な冊数に達するだろう。一人で調べるには効率が悪過ぎる。

「この迷宮に長年置かれた書物か。何か手掛かりがあるかも……。おい、一緒に探すぞ」

影丸は手近な書物を手に取り流し読みを開始しながら、周辺を探っている相棒に大声で伝えた。

- ・ 鷹助が相棒…6
- ・ 七兵衛が相棒…10
- ・ 鬼が相棒…14
- ・ 烏天狗が相棒…11
- ・ 鎮外が相棒…61
- ・ 銀太が相棒…52



「おい、大丈夫か？怪我は……」

「ん……んがつ？……おお？ここあ、魔剣の迷宮か。迷宮たあ面白そうだな。しかも黒魔羅の迷宮とは……随分と楽しめそうだな……ゲへへッ……」

…特に問題はなさそうだ。

寧ろ嬉しそうに拳を鳴らしては、ニヤニヤ笑い鋭い牙を突き出している。

金棒が如き突起の生えた魔羅は興奮したように勃起し、来るであろう未知の展開に期待し打ち震えている。

思わず影丸は己の魔羅と見比べつつ凝視してしまいそうになるが、また勃起している所を見られては鬼に弄ばれてしまうかもしれない。

「そ、そうか。……と、兎に角奥へ進むぞ」

「うゝっし!! 久々に俺の本気、見せてやらあ!」

強がりなのか天然なのか、清々しい程の態度に若干呆れつつ探索を開始しようとする。

「あ、ちよつと待てよ、相棒。……その前に一回休憩にしようぜえ」

「休憩？まだ周囲の調査も……って、う、うわっ! 何する貴様!!」

鬼はニヤニヤ笑いながら影丸の腰を掴むと、体の向きをこちらに向けて一気に真上に持ち上げた。戸惑う影丸の股間が顔面の高さまで持ち上げると、そのまま意気揚々と口に咥えた。半勃起だった魔羅は鬼の口内で一気に完全勃起し、嫌がつて暴れていた体はすぐに無抵抗になった。

「じゅぶじゅぶじゅぶじゅぶじゅるるるる……」

「や、止める……! この……変態鬼……やろ……! つああっ!! 腰が……腰が、動いて……んああっやあひぐうっ!! い……逝く……っ!」

空中で四肢を不自然に伸ばし、腰が鬼の口内に引き込まれるように強く押し付ける。正に弓ぞりの状態で全身を硬直させて身震いしつつ、影丸は射精した。

全身の筋肉が射精の快感で引き締まり、尻は童貞の者の様に硬く引き締まる。

魔羅は鬼の長くさら付く舌と鋭い牙で虐めるように愛撫させながら、濃厚な種汁を喉に向けて発射し続けた。

「こきゅこきゅこきゅこきゅこきゅ……ふはあゝ! 御馳走さん! やっぱ雄忍の種汁の味は格別だぜ!! ……んじゃ先へ進むぞ」

「……後で、お前の魔羅も咥えてやるからな」

「おう! 望むところだ。期待して待ってやんぜ」

黒魔羅の迷宮

「う、ううゝむ……ぬぬぬぬ……！」

分厚い書物の中身と睨み合いながら、鷹助は低く唸っていた。眉間に皺が寄り、必死に解読しようとして試みているのが分かる。

だが、さっぱりわからない。雄忍とは言え大魔羅に雇われたばかりの新人忍者にとって、古字や大陸文字は異世界の文明の様に見えてしまう。

「……じ、自分は高い場所から周囲を伺ってみます！何か見つかるかもしれません」

自分に言い聞かせるように叫びながら、鷹助は身軽な動きで棚板を足掛かりにして本棚に登った。本棚の天板はやはり埃塗れであり、歩く鷹助の足跡が鮮明に残る。天井とも近いので派手に動けないが、軽やかな足取りで本棚から本棚へと飛び移る。

だが、露出した魔羅と宰丸が内腿に当たり、思わず背筋が震えてしまうほどの快感が襲ってしまう。場所故に時には割り切って本棚の上で自慰行為をしてしまうので、至る所に鷹助の濃い種汁の溜まりが出来上がっていた。

「ああもう……なんで拙者の魔羅はこんな敏感なんだよお……」

そう嘆きながらある本棚まで移動すると、天板の上に何か小さいものが落ちているのに気付いた。拾ってみるとそれは一つの鍵であった。

埃で汚れてはいるが、黒光りする魔羅を象った艶かしい意匠である。

「師匠！鍵が落ちていました！きつと何かの役に立つと思います。持っていきましょう！」

嬉しそうに叫びながら鷹助は影丸に駆け寄る。同時に、何も見つけられなかったらどうしよう、という不安が解消された安心感にも満ちていた。

「……お、お前も同じか。随分と……また、沢山漏らしたみたいだな」

恥ずかしそうな影丸の足元を見ると、勃起した魔羅から糸引く種汁が、床に大きく拡がっていた。更に自分の魔羅を見れば、気付かぬ内に魔羅が種汁塗れになっており、溢れる先走りは意思とは無関係に滴っている。結局、調査中にも自慰行為をしてしまう二人の雄忍。

「何気に取った書物が春画本だったらこの様だ。……拙者もお前も、まだまだ修行が足りないな。……ここを出たら一緒に修業して強くなるぞ、鷹助」

「！しょ、承知ですっ！」

【鍵を手に入れました】

「これは……私にお任せを」

烏天狗が扉に向かって両手を掲げ、黒子頭巾の下で何か呪文のような言葉を呟く。意味があるようだが、少なくとも影丸の耳には出鱈目な言葉を呟いているようにしか聞こえない。

暫くの間詠唱は続き、そして不意に終了した。次の瞬間。扉を塞ぐように見えない壁のような物が一瞬現れた。

それはかなりの大きさだったが、日々が全体に広がっていくと同時に甲高い音と共に砕け散った。

「封じていた妖術を解きました。これで開く筈です」

「おお、流石は妖怪か。まあ、お前の場合はあの肝っ玉の小さささえ無ければ恐ろしいのだがな」

「そ、それは……言わないで下さい……」

余程心にくたのか、翼を肩ごとションボリと落としながら深く溜息を着く。

そんな弱弱い烏天狗に驚いたのか、慌てて慰めようと影丸は肩を軽く叩く。

「そんなに気にするな。お前の術が無ければこの迷宮も攻略できないだろう。頼りにしてるぞ、相棒」

「あい……ぼう!? はっはいっ!! 影丸殿の相棒として頑張らせて頂きます!!」

「そ、そうか、宜しく頼むぞ。あんまり、無茶はするなよ」

「はいっ!」

・扉の中に進む…17

迷宮の魔羅黒

「おいつ、おいつ、大丈夫か？」

「……う、うーん……っ!? こ、この妖気は……あつ、だだ、大丈夫ですか影丸殿!？」

意識を取り戻した烏天狗が心配そうな声で歩み寄る。やはり妖怪というだけあり妖気には敏感なのだろう。

萎えた魔羅はそれでも亀頭が膝辺りまで届くほど長く、浮き出た血管が生々しくも雄々しい。気弱な性格とは正反対のふてぶてしさで垂れ下がっている。

人間に似た肉体は魔羅の大きさに比例するようにしなやかに逞しく、上質の布の様に艶やかに輝く黒い翼との対比が艶かしい。

「だ、大丈夫だ。どうやら『黒魔羅』の作り出した迷宮らしいな。どうにかしてここから脱出しなければな」

「魔剣の迷宮、ですか。厄介な事になりましたね。こんな場所で二人つきりで……!!」

「ん、どうした。何か気付いたのか」

「……っ、つまり……今この迷宮には、私と影丸殿の二人だけしか……」

「あー……まあ、そういう事になるだろ……って、な、何を考え……」

聞き終わるまでも無く、烏天狗は影丸の足元に正座をして座り込む。そして、顔を迫る前垂れを半分ほど捲り上げると露出した口から舌を突き出した。

緊張で震えた舌先が、ズル剥けの亀頭に触れて鈴口に振じ込まれる。突然の奉仕に驚き戸惑う影丸を尻目に、抱き付く様に尻を抱え込むと味わう様にじつくりと魔羅を咥え込んでいく。

影丸も頭を離そうとするが、心のどこかで望んでいたのだろう。本気で離そうとはしない。

「んおっ!? おいつ! ふ、二人だけとはいえ迷宮の中で……っぎい!? ひんっ! ひんっ! ひぐっ!! おっおっおっおっおっおっおっおっ……」

「むぐ、むぐ、もう、もう、ぐちゅう……ぐちゅう……ぐちゅう……んふっ!! だ、出して下さい!

影丸殿の……種汁を……飲ませて下さ……っ! んふっ! じゅうっ!! じゅるるるるるるるるる!!」

下手だ。抑揚も無く矢鱈強く吸引ばかりし、時折歯か牙が擦れて若干痛い。舌の使い方も乱雑でただ只管に頭を前後させているだけだ。

だが、その素人さが新鮮だった。雄遍歴の長い影丸にとって、こうまで必死に文字通り食べるように攻める素人な口淫は初めてだった。

しかも、前垂れで表情が見えず息苦しさとし臭さに苦悶し興奮する声しか聞こえず、それが妄想を掻き立てる。

「あっあっあっぐっぐっぐっぐっぐっ……!! す、凄、いい……!! い、逝く……もう逝く、ぞ……」。

だ、だから全部……全部飲むんだぞ。拙者の種汁たっぷり飲ませて、飛べない程に腹を膨らませてや……あああっ! ぐっぐっぐっぐっぐっ!!」

「んぶんぶんぶんぶんぶうっ!! んんんんんんんんんんんんんんんん!! びゅーびゅーぐじょぐじょぎゅーぎゅーびゅーううううびゅーうううう!!」

迷宮の魔羅

黒魔羅の迷宮

声にならない歓喜の喘ぎ声を上げながら、烏天狗は影丸の大量の精液を喉に流し込む。
興奮で翼が何度も羽ばたき黒い羽根が周囲に舞い散る。初めて自分の意志で口淫した事への優越感
と想像以上に濃厚な種汁の臭いと苦みへの興奮が原因か。

翼は羽ばたきながらも小刻みに震え、暫くすると諸手を上げて快感を耐えるように最大まで広がる。同時に、烏天狗の魔羅も堂々と勃起しては、己の顎辺りにぶちまける様に射精をした。
口に入りきれない種汁が勢い良く溢れ出せば前垂れの下顔の顔を真っ白に汚し、落ちた羽根の上から
上塗りするように種汁の白が斑に飛び散る。

「こ、これが終わったら……はあはあはあ……た、探索を開始す……つあ！あああああ……」
「ごびゅごびゅじゅるじゅるじゅるじゅる……つぱ！は、はいい……で、でも……もう少し、も、
もう少し、影丸殿で私の中が満たされる……ま、で……！」

……こうして、二人が探索を開始するのは時間が暫く経過した後であった。

「七兵衛殿、気が付いたか」

「む、むう……、か、影丸殿……？……！？影丸殿！……ここは……魔剣の迷宮！？某らは……」

「ああ、恐らく魔剣に取り込まれたのだろう。……怪我は無いか？」

「あ、安心なされ。特に痛みは無い。……た、ただ多少厄介な事に……」

意識を取り戻し、影丸を含む周囲の光景を見た七兵衛は若干顔を紅潮させる。

二人とも着衣は完全に無くなっており、胸板や腹筋、体毛や魔羅が完全に露出していた。先程初めて雄欲を発散し合った仲故、ただその雄々しく逞しい肉体美を凝視するだけでも全身が火照って汗が滲んでしまう。

先程まで大量の種汁を漏らした魔羅は萎えてはいるが、まだ完全には腫れが引いていないようだ。亀頭を優しく擦れば、微かな快感と共に白濁の粘液の糸が長く伸びる。

思わず二人とも、相手の魔羅を凝視してしまう。羞恥心によつて自然と硬度が増してしまい、血管の浮き出た生々しくも武士らしく強直に勃起をしてしまう。

そして、互いに相手を誘う様に辜丸と幹全体を大きく揺さぶり……

「……うおっほん！七兵衛殿。と、兎に角ここから抜け出さねば……」

「！そ、そうですね。今は時間が惜しいですし……い、急ぎましょう！」

魔羅の迷宮

「?、!、これは!」

「どうした。何か見つけたのか?」

書物を調べていた七兵衛が素っ頓狂な声を上げる。影丸が声に驚いて駆け付ける。

七兵衛は本棚の間で立ったままある書物を読んでいるのだが、目を見開いて中身を凝視している。横目で影丸を視認すると、生唾を飲み込んで誘う様に視線を書物に戻す、

開いた書物を横から覗くと、そこには複数の男の姿が描かれていた。細かい筆使いで色彩豊かに描かれたそれは、まるで本物のように艶かしい。しかも、男たちか平面の紙の上で生きているように動いては、恐ろしいほどに巨大な魔羅を互いに弄り合っていた。

噴き出る種汁の音、喘ぐ野太い声、搔き混ぜるような水音、それらが熱気と生臭さを伴うように派手に聞こえてくる。

思わず視線を奪われた七兵衛と影丸の魔羅も敏感に反応し、先走りを垂れ流す。書物に目を奪われたまま鈴口がヒクヒクと伸縮し、熟れたカリ首が堂々とエラを広げる。

「か、影丸どの……そ、某は……」「……!? あ……せ、拙者もう……我慢は……!」

乾いた口で震える声を出すと、どちらからともなく相手の魔羅を握り合う。そのまま徐々に速度を増しながら扱き始める。扱けば扱くほど先走りが噴き出し、相手の指に絡み付く。

棚板に書物を立て掛けて絵画の乱交を凝視し続けながら、侍と忍者は鼻息荒く魔羅を虐め続ける。二人とも片足を棚板に持ち上げ股を大きく開きながら、相手に見て貰うように腰を前後に動かす。そして、掌に脈動の激しい動きが熱と共に伝わった次の瞬間、互いの体や多くの書物に向かって射精した。

「あっあっあっあっあっ……! か、影丸殿の厳つい指が……某の魔羅を……い、逝くうううう!!」

「はあっ! はあっ! はふあっ! 七兵衛殿の手も、拙者の魔羅を包んで……っ! んああああ……!」

程無くして、二人は同時に果てた。収められた書物を白く汚した種汁は、紙の一枚一枚に二人分の雄臭さを染み込ませていく。

互いの濡れた亀頭を押し付け合い、溢れる種汁や脈動する亀頭の荒ぶりを感じ合いながら、肩で息をする二人。

「はあ……はあ……はあ……さ、先を急ぐか……!」

「あ、ああっ……、そ、某も賛成でござる……!」

だが、言葉とは裏腹に二人の表情は射精の快感に満ちており、暫くは開放感の余韻に浸りたがっているように見えた。

魔羅の迷宮

「むう、これだけ天井が高ければ飛べるでしょうね。私は天井から全体を探してみます」
「分かった。上部は頼むぞ」

烏天狗は黒い翼を大きく広げて羽ばたくとそのまま一気に飛び立った。難なく書庫の天井付近まで到着すると、そのまま浮遊して全体を見下ろした。

漂う埃の多さや薄暗さも相まって若干見にくいのが、中々に広い書庫の全体図を俯瞰する。すると、ある一点を視界に入れた瞬間、何かに気付いたように急降下し始める。

股間から長く太い魔羅を堂々と垂らして飛び続けると、目当ての本棚の上に着地した。

「影丸殿！こんな所に鍵がありました！」

本棚の天板に置かれていたのは、掌に収まるほどの鍵であった。埃に埋もれていたが、鍵自体は目新しい物の様に妖しく黒光りしていた。

それを急いで拾い上げると、すぐさま影丸のいる地点にまで飛び帰って手渡す。

「おお、済まないな。……流石は黒魔羅の迷宮。鍵までこの形状か」

節くれ立った雄々しい勃起魔羅を象った鍵は、影丸の手の中で妖しい光沢を放っていた。まるで雄を誘う様に細かい意匠がなされた鍵は、思わず二人の視線を奪う。

そして、その視線は当たり前の様に互いの股間へと向かい……

「か、かか、影丸殿！……さ、先を急ぎましょう！鍵があるのなら、これで開けられる扉が必ずあるはずです！」

「!! あ、ああそうだな！早速先に進んでそれらしい扉を探してみよう」

明らかに勃起しそうに亀頭を持ち上げている魔羅を隠しはしないが、それから視線を反らすように歩き始めた。

……途中、何気なく本棚を使って左右に分かれたが、その隙に素早くも激しく自慰行為を行ったのは言うまでも無かった。

そして、小さくも良く響いて聞こえる野太い喘ぎ声と水音で、相手が自分と同じように魔羅を扱って射精していたことに互いに気付いていたのだった……。

【鍵】を手に入れました。

・合流して先へ進む…18

黒魔羅の迷宮

進んだ先には、二つの宝箱が置いてあった。
大きさや意匠は全く同じであったが、色は全く違っていた。一つは黒く、もう一つは白い。
また、正面の壁には古びた紙が貼られていた。

『開けられるのは一つのみ。慎重に選ぶ可し』

「つまり片方しか開けられない、と。流石は迷宮の宝箱と言ったところか」

- ・ 黒い宝箱を開ける…20
- ・ 白い宝箱を開ける…19

迷宮



相棒と周囲を警戒しながら先へ進むと、分かれ道に行き当たった。その先は薄暗くて視認することはできず、床には埃が溜まっているが足跡らしき痕跡は全く残っていない。

恐らく、この道を歩く者が通ったのは相当前の事なのだろう。

魔剣の迷宮、それは来るもの全てを拒むのだろう。前に侵入した者は一体どういう末路を辿ったのか。考えたくもない。

「……と、今は目の前の問題に集中しなければ。さて、どの道へ進むか」

道の中でも、左へ進む道は若干埃っぽい感じが風と共に流れてくるようで、相当の間放置されているようである。妖気は感じないが、何かしらが保管されている可能性がある。

また、階段の上からは、黒魔羅の迷宮らしいと言うのか、感じたことの無い強い妖気を感じられる。何かしらの発見があるかもしれないが、相当な危険が伴う可能性もある。

- ・ 左へ進む…4
- ・ 右へ進む…15
- ・ 直進する…33
- ・ 階段を上る…59

迷宮の



「……ん？この本棚、何か変だなあ」

本棚の密林を二人で歩いていると、ふと鬼が立ち止って呟いた。

視線の先には何の変哲もない本棚だ設置されている。壁際に設置されている本棚であるが、一見他の物と同様に埃が積もっているしか見えない。

「どうした、何か見つけたのか？拙者たちは春画本を探している訳ではないぞ」

「違えよ変態雄忍!!この辺りから風が吹いてやがる……」

「風……」

指先に涎を付けて本棚の前に掲げる。すると、本棚の背面、壁との接地面辺りから確かに風が吹いているようだ。指先が風に吹かれて若干冷える。

「確かに。まさかこの本棚は……」

「下がってな。ここはオレの出番だ。ふんっ!ぐぬぬぬぬ、ふんがあああああつ!!」

鬼は壁際の本棚に近付くと、諸手を上げて天板を鷲掴みする。それから両腕の筋肉に力を入れて血管が浮かび上がる程膨張させると、力に任せて一気に手前に引き倒した。

元々太い腕の筋肉が更に隆起し、滲んだ汗で濡れて照りを放つ。力んだ興奮の為か魔羅が若干上反りに勃起し、陰毛の合間から滲んだ汗が蒸気を沸かす。

その人間では到底感じられない雄々しさに、思わず影丸も性的に興奮してしまい、先走りを漏らしながら魔羅も勃起してしまふ。

そして、露出した本棚の裏手の壁に注意が向っている鬼の勃起した魔羅を手で……。

「やっぱりな!オレの勘が当たってみてえだな!スゲーだろ相棒よお!」

「!? あ、ああ!全くその通りだな」

急いで手を引いてから視線を上げると、本棚の裏の壁から新たな通路が顔を出した。

埃が舞っているが天井には等間隔で灯りが灯され、意外にも明るい。そのまま中に進むのは容易のようだ。

「うっし!先へ進むぞ!……途中でデメエの魔羅も処理もしてやるからよお!」

「せ、拙者一人でやるから必要無い!さっさと進むぞ!」

素直に肯定すれば口淫するのもあつさり許可してもらえただろうが、後ろめたさと雄忍としての強がりが、本心とは正反対の言葉を吐き出してしまった。

・隠し通路く…12

・戻って先へ進む…18

黒魔羅の迷宮

通路の先は十字路になっており、中でも直進した先には目立つ巨大な扉があった。木製のようなだが鉄製の丈夫な金具で至る所が補強されており、その巨大さから厚みも相当なものだろう。破壊も容易ではない。

取手を掴んで押しても引いても微動だにせず、鍵が閉まっているのかどうかも分からない。少なくとも人間の手では容易に開けることは出来ないだろう。

「この威圧感……。中には何かに重要な物があると思うのだが、人の手では開けられないのか？他の道もあるから、先を急ぐのも手だが」

・鬼が相棒……31

・烏天狗が相棒……7

二人とも相棒でなければ……

・左に進む……27

・右に進む……33

迷宮の羅網



今にも目の前で射精しそうな巨大な老鬼に、相棒の鬼が困惑と怒りが交差した複雑な表情を浮かべて歩み寄る。

そして、老鬼の快感に歪んだ表情を至近距離で凝視すると、確信したように叫んだ。

「お、親父……！里から逃げたと思ったらこんな所で油売ってたとはなあ!!」

「!? お、お前は……う、うあつ、見るんじゃない!! そんな汚らわしい物を見る目で見ないでくれえええ……!!」

「へっ! 嫌がつてんなら丁度良いぜ。テメエの種出し全部見てらやあ!! 勝手に里を逃げ出してお袋を死なせた、馬鹿鬼の痴態をなあ!!」

「ち、違うっ! そ、それには理由が……あつ! あんっ!!」

鬼が、老鬼の魔羅の裏筋を足の裏全体を使って全力で蹴り上げる。影丸の身長と同じ位の凄まじく巨大な魔羅を何度も何度も叩く様に蹴り上げる。

新たな衝撃は長年に亘る凌辱によって難なく快感に変わり、足裏で激しく擦り上げられれば鎖を鳴らしながら激しく下半身を悶えさせる。

罵倒するような厳しい口調とは裏腹に、鬼の魔羅は完全に勃起して先走りを滝のように漏らしていた。指に絡めて自慰行為をし続け、その間も老鬼への折檻を激しくして行った。

そして、二本の丸太の様な太く長く硬い魔羅が先走りや種汁でネットリ濡れると、鬼自身の裏筋を老鬼の裏筋に押し付けるように体に乗った。

「うぎっ!? お、重い……っ! お、お前もいつの間にか、こんなに大きく育って……がつ!? うぎいいいいいい……」

「んだよ!? その他人事な言い草はよお!! こっちは親無しで必死になって生きてきたのによお!! 近所のおっさん妖怪にや種壺にされるわ人間に捕縛されて性奴隷にされるわよお!! 全部テメエのせいなんだよ!!!」

鬼が全体重を老鬼に委ねたので、体を空中に支える四肢の鎖が強く食い込み強い痛みを与える。四肢が伸びて磔にされたように悶える自由も奪われ、涙目になりながえあ全身を小刻みに震わせる。しかし、そんな状態でも老鬼の魔羅の勃起は萎えなかった。寧ろ鎖の痛みが快感となって勃起を後押ししている様だった。そんな老鬼の肉体に嫌悪感を剥き出しにしつつ、裏筋同士を擦る様に激しく腰を動かした。

「ひんっふぎゅっ!? ひ、ひやあああああつ!!? や、止めろお! 止めてくれえっ!! お、父子同士でこんな……こんな破廉恥な事を……」

「ウルセエ!! テメエが逃げたからお袋が死んで……! テメエが逃げたから、テメエがオレをかまってくれねえから、俺がおっさん好きの雄狂いになったんだ!! ここで憂さ晴らしさせて貰うぞっ!!」

鬼は空中で抱き付いたまま腰を引いて、老鬼の肛門に挿入されていた張り型を無理矢理抜き取る。

それを器用に持ち直すと、口に含んで舌も使って全力で吸る。

血の繋がった父鬼の腸液は自分以上に濃厚で生臭く、雄のあらゆる体液に慣れた鬼でさえ舌や鼻腔が腐ってしまいそうだ。

啞えたまま体の位置を調整し、股の間に魔羅が来るように移動する。老鬼の太木の如き両足の間に蟹股の状態で腰を下ろす。足に体重がかかるが、難なく鬼の全身を支えられる。

足首の痛みによる喘ぎ声と共に肛門が開かれると、そのまま腰を股の間に下ろしつつ魔羅を的確に肛門へと挿入させようとにじり寄る。

そして、最後に飛び掛かる様に腰を押し付けると、躊躇無く己の魔羅を突き刺した。両足で老鬼の腹筋から胸板にかけて足を引っ掛け、両足は老鬼の脹脛を掴む。頭と足を正反対にした状態で老鬼に魔羅を挿入した。

その状態のまま己の屈強な肉体を最大限に駆使して空中に吊るされたまま、老鬼を突き上げて内壁を掻き混ぜる。記憶の中で威厳ある顔と表情で里をまとめていた老鬼の姿を、雄欲に塗れた淫獣へと変貌させる。

「ひやぎよおおお!!太いい!!お前の太い魔羅が儂の中に入るうううっ!!感じてしまうつ!!息子の魔羅で犯されて感じてしまうつ!!里を出たのはアイツの……母さんの病気を治すため……」

「そんな俺だって知ってたんだよ!!母さんは最期までテメエと一緒に過ごしたかったんだよ!!不治の病なんて治らなくても良かったんだよ!!この裏切り者!!オラッ!もつと喘いで種汁撒き散らせよ!!」

「ひざいいいい!!それでもお!それでも母さんを助けたかったんだ!この城に隠された秘薬を手に入れて、また家族で……!!つあああつ!!息子の魔羅で儂逝ってしまううううっ!!」

老鬼は四肢を不自然に硬直させて鎖を鳴らしながら腰を持ち上げた。だが、それでも鬼の魔羅は更に持ち上がるので追尾するように再度貫かれた。

懺悔と恍惚の狭間を揺れる表情のまま涎を垂れ流し、屈強な雄々しい鬼に成長した息子に向けて勢い良く射精した。

息子を創り出した種汁は、再度息子を創り直すように大量に噴き上がる。股の間から飛び出るように捕まる鬼の顔面や胸板、腹筋までも真っ白に汚して蒸せ返る熱気と雄臭さを周囲にも充満させる。

「おぐっ!?テメエの……親父の種汁、俺の口ん中まで飛び込んでくるぞ!オレの……雄狂いの父親狂いの鬼を孕ませた種汁が、またオレん中に飛び込んで……んっ!んんんっ!じゅぶっじゅぶぶぶじょおおおっ!!おとおおオレも出すぞお!!親父ん中にオレの種汁仕込んでまた孕ませてやらあ!!か……かああっ!覚悟しろやウラアアアアアア……!!!」

同時に、老鬼の中に雄叫びを上げた息子の種汁が注ぎ込まれた。

ふと見上げれば、先程までの怒りの表情から一変し、どこか切なさを帯びた悲しみの表情を浮かべているのに気付いた。

息子の鬼は種付け全身を震わせて汗を撒き散らしながら、一度老鬼の体から離れた。大の字で老鬼の真下に落ちると、老鬼の肛門から腸液と種汁の混ざった泡の塊が勢い良く噴き出た。全身にその生臭く生温い粘液を受けながら立ち上がると、脱力したように揺れながらも老鬼の四肢を拘束していた鎖を掴んでは力に任せて引き千切っていく。

黒魔の速鬼

徐々に鎖が崩れ落ちる音の中、老鬼は確かに聞いた。

「……俺だって、親父の事、昔から……だから、ずっと一緒に居たかったんだよ……畜生……!!」
「……………息子よ。儂も、お前の事は忘れたことは無かったぞ……。悪かったな」

床に落ちた父親の淫らでもあるが、逞しく頼り甲斐のある体に抱き付いたまま、息子鬼は体に似合わない震える小声で呟いた。

そんな筋骨隆々に成長した息子の体を、父親は太く長い腕で優しく包み込むように抱き返したのであった。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はあっ……………うっ、んんっ…………!!お、親子、だったのか。近親そうか…………いや、言うのは野暮だな」

驚く影丸の魔羅は勿論種汁を勢い良く発射させており、足元に白い染みを作っていた。

だが、それ以上に大きい染みが、愛し合う父子の股間周辺にも広がっていた。それまで溜め込んでいた互いの想いを吐き出したかのように。

二人の鬼の吐き出した雄臭さと熱気は暫く収まらず、部屋の中を包み込んでいた。

【老鬼】を仲間にしました。

・【鍵】を持っ…こ…23

・【鍵】を持っ…こ…22

黒魔羅の迷宮

「むっ?!」この空気を感じ……里の……いや、雄の濃厚な、しかも年季の入った頑固な生臭さ……。流石は黒魔羅の迷宮……なのか？」

扉を抜けると同時に、全身を纏わり付くような生暖かい空気が包み込んだ。影丸が長年慣れ親しんだ、淫乱な雄の漏らす臭いと熱気が一気に影丸の鼓動を強める。

特に人生の酸いも甘いも知った高齢な雄の漏らす種汁、上質な酒の様に長年凝縮され雄の性欲を絡み取るような雄臭さと熱気である。

室内は想像以上に広く天井も高い。まるで寺の本堂のように大きい仏座が設置されている。

だが、仏座の上に仏壇は無く、代わりに『ある者』が拘束されていた。拘束と言うよりも鎖で吊るされているようだった。それは一見人間のようなだが、赤い肌と鋼の様に鍛え込まれた屈強な筋肉に人間離れた大きな体をしている。

四肢を鎖に繋がれ大の字の体勢のまま空中で仰向けにされており、山の様に丰满な胸板に岩肌のように割れた腹筋、更には樹海の様に濃い陰毛の塊から突き出た魔羅と巨大な睾丸がふてぶてしく感じる程に揺れ動いていた。

加えて、肛門には太い張り型が根元まで挿入されており、しかもそれが怪しく振動している。

強く張り型を咥える肛門は鈴口と同じように粘液を噴き出しており、糸を引いて滴る粘液が台座の上に大きく汚い水溜りを作っている。

「あっあっいやっいやっいやああんっ壊れるう! 農壊れてああ出る出る逝くう!! 鬼なのにお漏らしするうううっ!! はあんはあんはああんひやぎやあああああん!!」

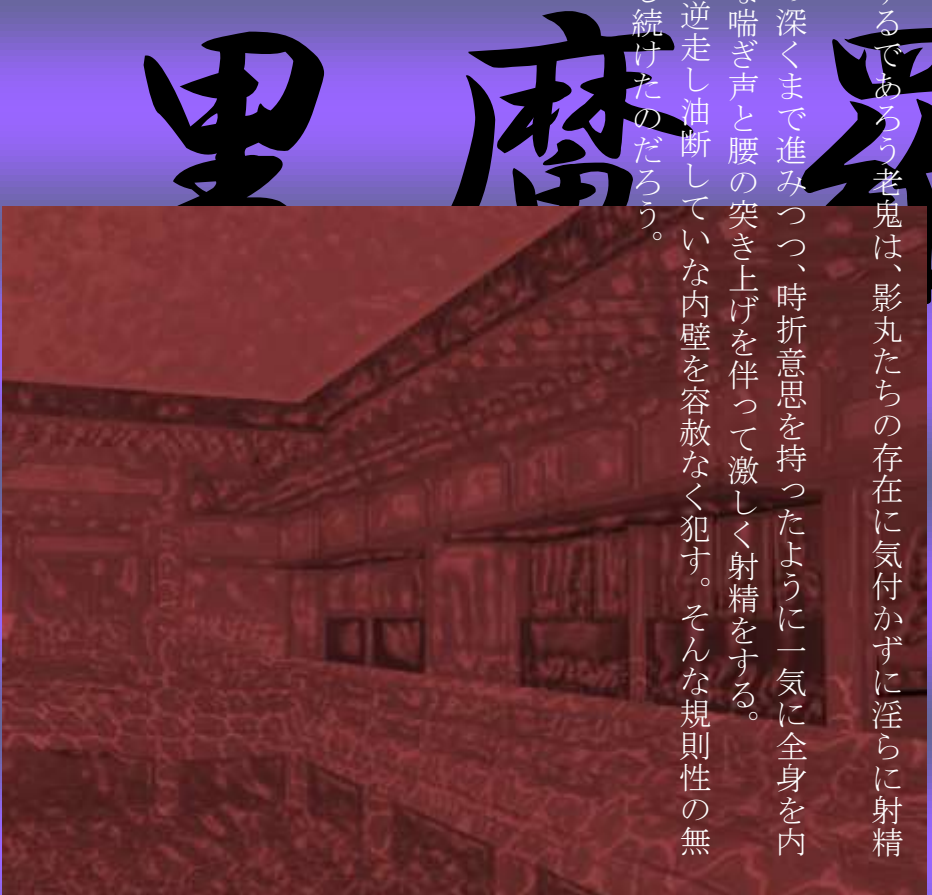
普通なら威厳ある態度で人間を圧倒するであろう老鬼は、影丸たちの存在に気付かず淫らに射精を繰り返していた。

震える張り型は徐々に根元まで肛門の深くまで進みつつ、時折意思を持ったように一気に全身を内部に挿入させる、その時は一際大きな喘ぎ声と腰の突き上げを伴って激しく射精をする。

抜ける時も一見抜けそうな時も、突然逆走し油断していない内壁を容赦なく犯す。そんな規則性の無い攻めによって、長い間種汁を漏らし続けたのだろう。

・鬼が相棒…16

・烏天狗が相棒…21



消える気配の全くない妖しい気配がする中を進んで行くと、行き先が二手に分かれていた。最早何度目かの分岐点か覚えていないが、分岐によってこれから狙う方向性が大きく変化するだろう。

思い切って二手に分かれる方法もあるにはあるが、この魔剣の迷宮内で単独行動は自殺行為である。

一人になった途端、常を感じる妖しい気配そのものに飲み込まれてしまう可能性も否定できない。何もわからない場所だからこそ、複数で行動するのが得策であるが、助けが来る可能性が皆無であるなら悩む前に動き回るしかない。

「悩む時間も無駄に出来んな。ならばここはこつちに進むか」

そう言い、影丸は片方の通路に向かって進み始めた。

- ・ 左に進む…34
- ・ 右に進む…49

迷宮の四魔黒

用心したまま白い宝箱を開けると同時に、開けなかった黒い宝箱が溶けるように消えてしまった。

「成程、こういう仕掛けならば両方開けるのは不可能だな。……さて、こっちの中身は」

白い宝箱の中を覗くと、底に固定された錆び付いた鍵が一つ入っていた。

鍵と同じ形の溝に填められていただけなので容易に取り出せるが、目に見えて強度が失われているのが分かる。

今すぐには壊れはしないだろうが、強く床か壁に投げつければ簡単に折れてしまいそうだ。

「凄く錆だな。壊れてしまいそうだが……鍵は重要な道具だな。持っていこう」

【鍵】を手に入れました。

・先へ進む…16

迷宮の四魔黒

悩んだ末に黒い宝箱を開けると、それと同時に白い宝箱が溶けるように消えてしまった。

「流石は魔剣の迷宮。物を消失させるのは当たり前か。……では、黒の中には」

黒い宝箱の中には綺麗に輝く宝玉が入っていた。底に開けられた窪みに填まる形で置かれており、転がることも無く簡単に手に取れた。

目の前にかざしても単なる透明な宝玉で、見る角度によっては美しく光の筋が何重にも走って見える。

「美しいが、微かに妖気が……。何かの呪具なのか？呪われるかもしれないが……。使えるものは使わないと脱出の糸口も見つからんしな。持っていくか」

【宝玉】を入手しました。

・先く進む…28

迷宮の四魔黒

「!? あ、あれは……まさか……」

烏天狗が何かに気付いたように磔の鬼に向かって飛び立つ。恍惚に歪む鬼の表情を間近で確認すると、驚くような声を上げる。

「頭領様！間違いない！やつと見付けました！ああ、こんな場所に閉じ込められていたとは……」

「お、おお……。その声は……お前か!? すまぬ、世話をかけたな」

「今お助けします！この鎖ならば我の妖術で……」

「そ、それよりもだな、烏……」

鬼は虚ろな目で烏天狗の魔羅を凝視した後、視線を自分の魔羅へと向ける。前立腺を刺激され続け萎える事を知らない巨木のような巨大な魔羅から、先走りを漏らしながら揺らす。

「儂の魔羅を受け容れられる数少ない同胞であるお前に……久し振りに……種付けを……んっ……んあああっ! か、考えただけで肛門があっ!! があああっ!!」

鬼の豊富な尻が力んで引き締まると、響くような唸り声と共に張り型が勢い良く吹き飛んだ。肛門からは蠢く内壁から分泌される大量の腸液が太腿を伝い、強烈な生臭さを沸き立たせながら仏座を汚す。

そして、瞬間的に激しく前立腺を刺激された魔羅は太刀のような弓反り状態で勃起し、あまりの長さには亀頭は胸板辺りにまで達していた。

太さも、烏天狗の体より多少は細い程度で、尋常では無い太さで表面を脈打たせている。溢れる先走りは既に白く濁り始め、噴き出しては烏天狗の黒子頭巾を斑に汚す。

「しょ、承知ですっ! し、暫しお待ちを……」

「た、頼むぞお……。もう、魔羅が疼いて……お前の柔らかな肛門を欲しておるぞ……」

烏天狗は翼を羽ばたかせながら鬼の亀頭の真上に止まり、股を肛門ごと大きく広げる。

そして、自分の指と涎で軽く解すとそのまま調整しながら高度を下げて行く。互いの体が触れ合うと一瞬体を痙攣させて、艶めいた声を漏らす。

更にそのまま高度を下げて行く。烏天狗の切ない喘ぎと鬼の雄々しい呻きに合わせて、肛門の肉が広がる音や体液が絡み合う水音が鼓膜を揺さぶる。

「ぐひいつ!! が、ふぎゅ……。つあああああ……。びゅっ! がひゅううっ!!??」

「んんっ! お、おおおおおっ! あ、相変わらず熱くて柔らかいぞ……。さ、流石は儂の認めた雄穴の持ち主じゃあ……。!! つがあ! 逝くう! も、もう気持ち良過ぎて……。逝くううううっ……。!!」

「ごぼっ!?! ぐひいつ! と、頭領さまあああっ……。あんっ! あんっ! あんっ! 中が擦れて良いっ! 我もっ! 我も逝きますううううっ!! ぐぼっ! びゅううううううう!!??」

烏天狗の腹筋が突如大きく盛り上がる。肛門を貫いた鬼の魔羅が体内から烏天狗を突き上げる。鬼

が腰を動かす度に腹筋が何度も突き上げられ、黒子頭巾の中から大量の涎を喘ぎと共に垂れ流す。翼の羽ばたきを止めると全体重が魔羅にかかり一掃腹筋の盛り上がりが大きくなる。肛門は真つ赤に腫れながらも難無く魔羅を咥え込み、溢れ出る腸液と精液で下半身を雄臭く汚す。鬼の射精が想像以上に大量で、肛門どころか烏天狗の口からも逆噴射されてしまった。黒子頭巾の前垂れの中から勢い良く種汁が噴き出し、呂律の回らない舌が苦しそうに悶えている。

烏天狗の魔羅も程なく射精してしまい、城で大量に射精したばかりとは思えない程に濃厚なモノを噴き出す。

目の前の鬼の厚い胸板を白く汚して口内にも注がせる。久し振りの烏天狗の種汁の苦味に、鬼は下を舐め回して執拗に味わう。

「んお、おほおおお……！烏よ……共に行くぞ。この迷宮から抜け出すために、な」
「グボオグオブオゲロツ……！とよりよ、さまあぁ……」

次第に互いの種汁で真つ白に汚されて行く二体の妖怪。見ている影丸も溢れる種汁を抑え切れないほどに雄々しく妖艶な交尾は、この仏間を淫らな雄草さと熱気に包まれた盛り場へと変貌させた。気付けば、影丸も二体の足元で四つん這いに屈み顔を床に押し付けて体液を舐め回していた。

「次へ……はぁ……むかわ……あぁ……」

【老鬼】が仲間になりました。

・【鍵】を持ってこな……23
・【鍵】を持ってこな……22

迷宮の魔羅黒

雄欲に塗れた肉宴が収まった後、影丸たちは老鬼たちの体力が回復するのを見計らって、彼らを率いて仏間の奥の扉に向かう。

しかし、肝心の扉には鍵が掛けられており進むことが出来ない。

「ここも封鎖されているな。この部屋の中に鍵か何かが……」

室内を探そうと踵を返した影丸に対して、老鬼は手で種汁を拭い舐め取りながら言う。

「いや。確か仏座の裏に隠し通路があつたはずだ。儂を捕えた者もそこから出入りをしていた。……ただ、儂の死角だったからな。詳しい解除方法は知らないが……」

「隠し通路？台座の裏に……とすると、この辺りに……!?これか……つと」

台座の陰に隠れるように設置されていたのは、小さな突起であつた。それを指先で押すと部屋全体に地震のような振動が襲う。

同時に、仏座の裏手の壁の一部が大きな音と共に回転し新たな通路が姿を現した。間違いない。これこそ老鬼が言っていた隠し通路だろう。

・隠し通路を抜ける……4

黒魔羅の迷宮

老鬼たちの体力の回復状態を確認しつつ、飛び散った体液の海を掻き分ける。人間離れた濃厚な雄臭さを鼻腔に感じながら進むと、仏間の奥に扉が見えた。

取手を掴んで開けようとするが、扉は微動だにしない。どうやら鍵が閉まっているようだ。

「む、それなら先程入手した鍵で……」

先程入手した鍵を鍵穴に差し込み捻ると、難無く扉が開いた。

扉の先には長く続く通路があり、薄灯りの中敵の気配を探りながら慎重に進む。

そんな影丸たちの動きを笑っているかのように、奥へ進む通路の中央にドンと置かれていた宝箱が目に入る。

周囲に異が無いか確認し、問題は無いと分かると蓋を開ける。中には眩く輝く宝玉が置かれていた。一見美しく削られた宝玉であるが、それ以上に強い力が込められているのが分かる。

「かなりの妖力を貯めた……何かの結晶か？切り札にも使えそうだな」

【宝玉】を入手しました。

・奥へ進む…28

黒魔羅の迷宮

牢獄の奥の鉄扉には鍵が掛かっていたが、入手していた鍵で簡単に開けられた。中には長い通路が続いており、若干先が薄暗く怪しい空気が吹き込んでくる。

また、歩行の邪魔をするように通路の中央には一つの壺が置かれていた。

見せ付けるように置かれたそれは一見怪しい気配を放っているようだが、近付いても特に問題は無かった。

影丸が拾っても、特に体に異変は見られない。

「微かに妖力が感じられるな。何か封印されているのか？ いや、それなら封がされているようだが……。むう、と、とにかく持っていくか」

【壺】を入手しました。

・奥へ進む…28

迷宮の四魔黒

「い、ご主人様!? な、何故こんな所に!」

鷹助が驚いたように大声を上げ鉄格子越しに視線を男に向ける。慌てた様子で入り口の南京錠を手際良く外すと、男の傍に駆け寄る。

心配そうに顔を覗き込むと、反応を見るために大声で名前を呼ぶ。

「ご主人様! 拙者です! 鷹助です! 大魔羅城に侵入とは知っていましたが、まさか……」

「ぐっ……お、おお。鷹助、か。悪いな、こう容易くも魔剣に取り込まれるとは」

「いいえ、ご主人様が無事なだけで十分で御座います! 拙者はそのために潜入したので……」

「あぁっ……わ、悪い鷹助。私はもう……我慢が……!!」

次第に呼吸が荒くなり、口から涎を垂れ流している。それが濃い無精髭を濡らし首筋にまで伝っていかという瞬間、突然鷹助の体に飛び掛かる。

何処にそんな体力が残っていたのかは知らないが、まるで餌でも見つけた肉食獣のように鋭い飛び込みだった。

突然の行動に驚く鷹助を尻目に、主人と呼ばれた男は鷹助の両足を掴むとそのまま真上に持ち上げる。そして、尻が根の前にくるように足を広げさせると躊躇無く肛門に口を押し付けた。

「ひやいいっ!? な、なにをおご主人さま!? こ、こんな所で……」

「儂も欲に塗れた雄なのだ!! 許せ鷹助え! もう我慢ならんのだぁぁぁ!!」

大量の涎を注ぎ込ませて解れた鷹助の肛門は容易に男の舌を受け入れ、鼓膜をくすぐるような粘り気の強い水音を立てる。

内壁で排泄の為に蠢いていた襷を舌先で一枚一枚掻き分けて、只管に硬い性感帯である前立腺へと突き進む。

その目は血走りながら気迫がこもっており、本気で食欲に鷹助を貪り尽くそうとしている目だった。

「んぶっんぶっんっ……ジュブジュブジュブ……ジュルルッ」

「!? ん、ご主人様あ!! 駄目ですっ! し、師匠が見てる前でいひやぁぁぁんっ!!? そこ感じますうっ!!? そこ突かれたら拙者お漏らしいっ!! 色んなお汁お漏らしじやいまじゅうううっ!!!」

舌先が的確に前立腺を捉えると、鷹助は一気に魔羅を勃起させ間髪いれずに鈴口から液体を噴き出した。だが、それは白濁液では無く透明な液体だった。尿の様な刺激臭もせず、間隔を空けながら何度も何度も勢い良く鷹助の全身を滝の様に伝い溢れた。

「あぁんっ! あはぁんっ! なな……何かあ! 拙者の魔羅が潮を噴いてますよお!! あ……あはっ……ひやぁんっ! ごしゅじんさまあ! ごしゅじんさまやめてえ!! お潮のお漏らしい! お尻の中舐められたらお漏らしとまらにやいれしゅうううっ!!」

「まだだ! 潮吹きの際は射精だ! 儂の指で次こそ種汁をお漏らしせいっ! ぬおおお……!!」

「いんっ！いぎいいいいっ！指凄っ！しゅごいっお尻の中でしゅごくはやくうごいてりゆうううう！抜いてえんっ！ああぬかないでえんっ！！拙者をもっと突き刺してえええんっ！！」

主人の伸ばした指が拳ごと鷹助の肛門に挿じ込まれる。可能な限りの速さで出入りを繰り返し内壁や前立腺を酷使させると、自ら求めるように肛門から力を抜いて全身を痙攣させる。

そして、ガバガバになった肛門に手首まで完全に挿じ込まれ前立腺に辿り着いた瞬間、鷹助は狂った喘ぎ声を出しながら射精した。

城内での行為が後を引いているのか未だに感度が良く、間欠泉が如く種汁を顔面に浴びるが主人に犯されているという事実が一層興奮を強める。

主人も指を使って更に肛門を押し広げ、赤黒い内壁を外気に晒しながら涎を注ぎ込む。肛門を包む長い陰毛のザラ付いた舌触りが体臭と交わり雄の色気を作り出す。

顔面を包み込む腸液の熱気が顔面の皺一本一本に染み渡り、濃厚な雄臭さも合間つて主人の魔羅を痛い程にいきり勃たせる。

「鷹助、中に挿れるぞ……。私の魔羅はもう、雄を犯したくて疼き果てそうなのだ……。っ！何時ものように、私の布団の上でやるように激しく……。っ！」

鷹助の反応を待たずに、主人は弱った体でよろめきながら亀頭を肛門に押し付ける。そのままゆっくりと腰を押し付けると、刀を鞘に納めるように魔羅を挿入した。

人間離れた巨根はゆっくりと肉の軋む音を立てながら鷹助の中に挿入され、真っ赤に腫れた肛門から腸液が吹き出る度に鷹助が甲高い喘ぎを上げる。

同時に、主人は溢れた影丸の種汁を大量に指に絡めるとそのまま自身の乳首を弄り始める。硬く勃起した乳首が指先で転がり、更に肥大化して行く。

「ひ、ご、ごしゅじ、んさま、あああああっ」

腹の底から吐き出すように喘ぎを漏らすと、格子越しにこちらを凝視しながら自慰行為に勤しむ影丸の痴態が視界に入った。

自身と主人の交わりを肴にして射精を繰り返す影丸の視線が性欲を攪り、興奮剤のように全身を火照らせる。

突き上げる巨根が腹を内部から打ち上げ、鷹助の口からは逆流した種付が溢れ出す。

「あああああつ！！うばばばおっ！！？しゅじよおおお……。っ！！も、もつど見でえ……。っあ、い、逝ぐうううう」

「ふごおおおお……。っ！！鷹助の肛門が私の魔羅をおお……。っ！！私の子種が搾らあああああつ！！！」

「はあああああつ……。鷹助の任務は、これだったのか……。んっ！」

影丸が天を仰いで汗に滲んだ肉体を身震いさせると、水鉄砲のように勢い良く種汁が発射した。同

時に尻の肉が引き締まり肛門が一気に縮小すると、主人の魔羅が内壁に締め付けられ蠢くヒダに愛撫されるように刺激する。

主人が狂ったように大きく肉体を暴れさせながら、久方振りの種付けを行った。溜まりに溜まった豚骨のように濃厚な溜まった種汁が、影丸の下腹部を一気に膨張させた。

【雄将】を仲間にしました。

・【鍵】を入手して…24

・【鍵】を入手して…12

迷宮の魔羅黒

影丸を追い越すように牢の手前に駆け寄ると、七兵衛は中の雄に驚いたように声を荒げる。

「殿！殿ではありませんか！この七兵衛、殿の救助のため只今参上しました！今鍵を開けるので暫しお待ちを！」

隻眼を大きく見開いて驚くと、一步牢から退く。そして姿勢を低くし腰に残る刀の柄と鞘を両手で掴み、目にも止まらぬ速さの抜刀術一発で南京錠を真つ二つに斬り裂いた。

硬く張った筋肉が脈打ち、刀を抜いたと同時に鬚と同じ大きさの魔羅が大きく揺れる。寧丸の揺れ様も大袈裟に見える程で、七兵衛の備えた雄々しさがそれだけ見ても確信できる程に淫靡であった。

影丸がその魔羅の暴れっぷりに釘付けになっている中、七兵衛は刀を鞘に戻し牢の中に入る。まるで腑抜けたように四肢を投げ出し裸体を晒す男に駆け寄ると、傍に膝を付き顔色を確認する。

「お、おお……この雄臭さは……七兵衛……！た、助けに来てくれたか……」

「無論です。某が殿から受けました御恩、忘れるわけが御座いません。立てますか？」

「あ、ああ……いつもの『薬』を飲めば問題無い。……頼むぞ、七兵衛……！」

「え……も、申し訳ありません。某の薬は今薄くなっております……。い、今暫くお待ちいただければ……」

「おおおおお、おおおおおおおつ!!薬じゃあ!雄の種汁じゃあああああつ!!」

殿の目が急に血走り妖しく輝き出すと、そのまま押し倒すような勢いで七兵衛の腰に抱き着く。押し倒され大きく開いた股間にそのまま顔を埋める。

そして、陰毛の間から沸き立つ熟れた汗の蒸気で顔面を火照らせながら、陰毛の塊ごと一気に魔羅を口に咥えた。七兵衛の肉刀に染み込んだ雄臭さが鼻腔を一気に麻痺させ、舌を暴れさせれば魔羅の垢の苦味が表面を刺激する。

戸惑いながらも七兵衛は股を更に大きく広げ腰を顔の高さに合わせるように浮かび上げる。執拗な吸引と根元からの扱き上げと共に、自分の魔羅がしゃぶられる様を鼻息荒く凝視する。

侍として長年悶え続けた的確かつ執拗な舌の動きが使い込まれた魔羅を最大まで勃起させ、殿の頬を大きく裏から突き上げる。

「と、殿っ!そ、某は先程射精をしたばかりで……っあ!ああっああっああっ!!?そ、そこ良いですっ!と、殿の淫靡な歯と舌が……某の変態魔羅を……魔羅を嘔っておりますっ!!」

殿の八重歯が尿道に突き立てられ、魔羅を咥える唇が強く萎む。まるで先程とは別人のように生き生きとした動きで顔を前後に動かし、同時に金玉を掌で転がし陰毛を涎で汚す。

延びる皮を甘噛みし亀頭の裏側まで丹念に舐め回す。頭上から聞こえる七兵衛の甘い喘ぎが鼓膜を刺激し頭の中を蕩けさせる。

未だに盛んな舌の動きが下半身を熱の帯びた快感に震わせ、殿の劣らぬ雄々しい淫らさに胸が痛い程に鼓動する。

魔羅の速攻

「むううう……うふっ！はああああっ……！す、凄いですっ！と、殿の口が、某の魔羅粕で汚くな
つて……ああでも殿の精力のためならば、例えば人前でも魔羅を晒す所存を……っあ！ああ！も、
漏れ……飲んで下され……殿おおおおっ！」
「フゴッフゴッ……んっ！んほお……、これはまた一段と濃い種汁だ……！ゴキユゴキユゴキユ
……喉が焼け付くような粘り気と雄臭さ……堪らん……っ！」

七兵衛の眼帯が汗で滑り落ちそうな程に激しく乱れると、殿の顔に押し付けるように腰を浮かべて
喉奥に直接射精した。

喉から逆流した種汁が髭の生えた殿の顎を汚しながら糸を引く。

奉仕される出入りする七兵衛の魔羅が種汁と涎でネットリ濡れながら泡立ち、浮き出た血管の太さ
が収まらない精力の強さを表す。

溢れた自身の種汁を指で掬い、それを潤滑油に乳首を荒々しい動きで抓り上げる。

殿も喉仏を上下させ種汁を飲みながら自身の魔羅を扱き、大量の種汁を床に吐き出していた。

大蛇が毒液を吐き出すように大量に勢い良く噴き出し、規格外の巨根は暫くの間地面を叩くように
暴れ続けた。

二人分の濃厚な雄臭さが熱気と共に拡がり、格子越しに魔羅を突き刺し射精している影丸の鼻腔も
刺激した。

「くっ……ほああああ……。思い出してしまう……！我が里の頭領の極上魔羅の太さ熱さ生臭さが
ああ！」

【雄将】を仲間にしました。

・【鍵】を持ってこる…24

・【鍵】を持ってこる…12

黒魔羅の迷宮

更に先へ進んで行くと、何やら物々しい場所に辿り着いた。

「随分と古びた牢獄だな。むっ……！この臭いは……！」

濃厚でむせ返るような腐臭、雄臭さが影丸の鼻腔を不意に襲う。

牢獄の鉄格子はまるで朽ち果てたように錆が浮き上がり、床に広がる染みの多さが捕縛し陵辱された雄共の狂い具合を表しているようだ。

「あひ……んっ！ま、まだ逝くううう……！」

牢獄の中で、年配の男が射精をした。若干やつれてはいるが筋骨は逞しく、肛門に挿入された恐ろしい程に太い張り型が執拗に食い込んでいる。

髭や太い眉、角張った顎や大柄な体から厳格な印象を見付けられるが、自身の体液で汚く汚れ切った今の姿はまるで奴隷のようであった。

そして、何よりも人間離れしたおぞましい程の巨根が、影丸らの魔羅を威嚇するように堂々と勃起していた。

喉の渴きを癒すためか、男は床に舌を這わせて自身の漏らした種汁をジュルジュルと吸っていた。

「まだ囚われている者がいたのか！すぐに助けなければ……」

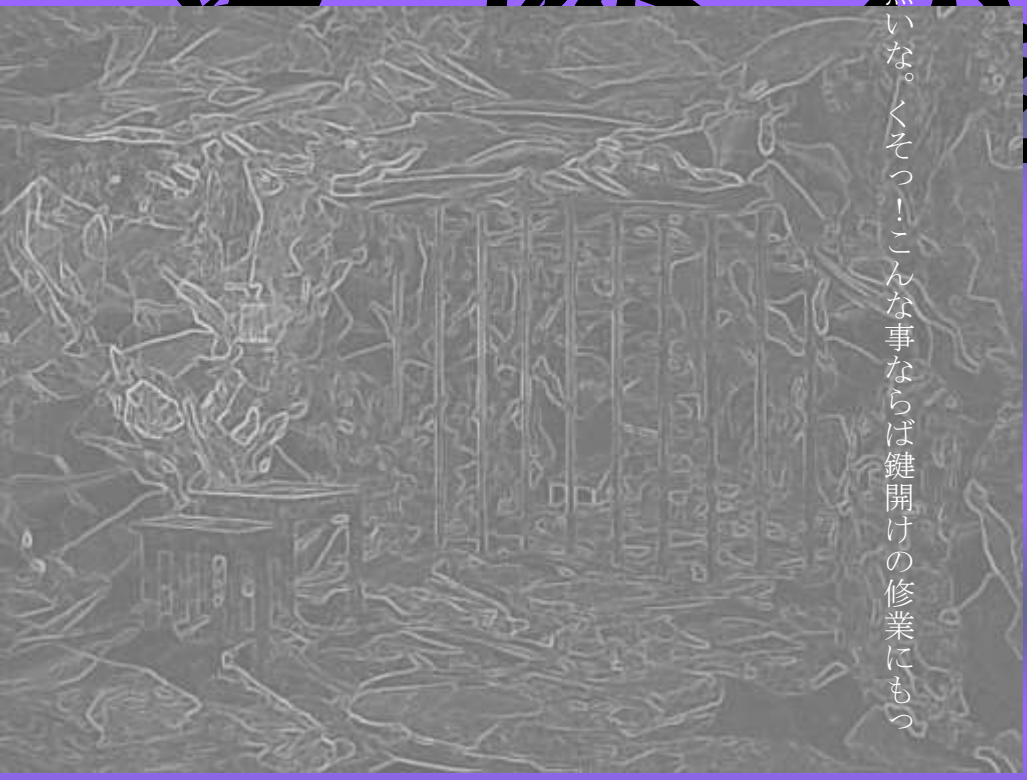
影丸が南京錠を外そうとしても回らない。機構は単純そうだが影丸にとっては初見の錠で開けることは難しそうだ。

「む、この形は……この辺りの地域のものではないな。くそっ！こんな事ならば鍵開けの修業にもっと身を入れていれば……」

・【鷹助】が相棒…25

・【七兵衛】が相棒…26

・先を急ぐ…33



「まるで壁だな、これは……」

影丸が見上げる先には、巨大な扉が立ちはだかつていた。全身を包み込むほどの瘴気が隙間と言う隙間から流れ出ており、肌に微かな痛みを感じる。

一見古びた木製の扉であるが、全身の力を込めて押しても引いても滑らせても開く気配は全く無い。

その代わり、横の壁には大きな穴が空いており、その中央には長くて細い鉄棒が迫り来るように立っている。横に倒された細長い燭台とでも言うべきだろうか。かなり変わった形をしている。

穴の横には古びた和紙に墨で描かれたと思われる書が貼られていた。かなり年季の入った文字であるが、影丸は難なく解読する。

『この先行きたけば、汝の魔羅を鍵と成して挿すべし。太き魔羅と緩き尿道を鍵とすれば、道は開かれる』

「この穴に魔羅を挿し込めば扉が開くのか……？だが、この太さでは……う、むむう……拙者では無理だ」

・【老鬼】が仲間……32

・【雄将】が仲間……35

・【大きな張り型】を入手している……62

・これにも当てはまらない……39

「まるで火事の中か霧の中にいるようだな。視界が狭い」
「そうですね。何かしら鍵となるものが見つけられればよいんですが」

鷹助が前方の、影丸が後方の警戒をそれぞれ行いながら長い廊下を進む。至る所から妖しい気配と瘴気の気配が放たれており、扉を発見するのすら困難に思えてくる。そんな中で、影丸の足が不意に止まる。鷹助も慌ててその場で停止すると警戒しながら影丸に尋ねる。

「し、師匠!? どうしましたか!? まさか敵が……!」

「いや違う。……この真上、天井の梁の辺りから若干気になる妖気を感じたのだが……」

「て、天井ですか?」

二人して見上げると、瘴気の紫の霧の向こうに確かに梁が走っているのが見える。だが、角度的にも高度的にもここから視認するのは困難である。

すると何を思ったのか、気合を入れるように拳を作つて両腕を回してから鷹助が壁をよじ登り始めた。

驚く影丸をよそに天井近くの梁にまで到着する。周囲の梁の上をよく見ると、梁の幅よりも小さな箱が置かれているのが見えた。どうやらこれが妖気の正体のようだ。

小箱を掴んで悦び勇んで床に飛び降りると、誇らしげに影丸に見せつける。頭巾の中の表情は間違はなく笑みを浮かべているだろう。

「師匠! この妖気は絶対に何か重要な物が入っている筈です!」

「おい待て! 罨の確認を……!」

勢い良く蓋を開けると、中には漆黒の闇を思わせる小さな壺が入っている。臭気に負けず劣らずの強い妖気を放っているが、影丸たちには害はないようだ。

「この強い妖気は役立つに違いない! ……って、どうしましたか師匠?」

「……いや、何でもない。だが、次からはもっと慎重にな」

「?」しよ、承知です」

【壺】を手に入れました。

・先へ進む…28

迷宮の魔黒

瘴気に耐性のある烏天狗に先を任せ、影丸は後方の警戒をしつつ廊下を進む。羽ばたく大きな翼が適度に瘴気を吹き飛ばしてくれるので、視界も若干広がりつつある。何かしらの見落としがないように注意を払いながら、視線を周囲に向ける。

「あれは……。暫しお待ちを」

飛びながら天井を見上げていた烏天狗はそう言っていると、翼を広げて天井の梁に向かって飛び立った。梁の上に着地すると、前垂れ越しに周囲に視線を向けて何かを探するように梁から梁へと飛び回る。暫くすると、羽ばたき音と共に影丸の目の前に降りてきた。その両手に抱える程の大きな箱を抱えている。

烏天狗もだろうが、影丸も箱から強い妖気を感じて全身を震わせる。烏天狗はこの存在に気付いて飛び立ったのだろう。

「この妖気から、恐らく術具か何かだと思うのですが……。我が開けましょう。人よりは妖気に耐性があるでしょう」

「済まない。頼むぞ」

烏天狗が影丸から距離を取って注意深く蓋を開けると、中には小さな壺が入っていた。一見中身が空のただの黒い壺だが、放たれる妖気は周囲の臭気を押し退けるように強い。

「壺、ですか。……何かしらの術に対抗出来るかもしれませんが。私が持って行きましょう」

「何から何まで悪いな。ただ何か異変を感じたらすぐに伝えてくれ。拙者もできる限り手は尽くそう」

「あ、ありがとうございます……」

顔が隠れる前垂れ頭巾を被っていて良かったと、烏天狗は思った。もし無かったならば、真っ赤に染まった恥ずかしい顔を影丸に直視されていただろう。

妖怪の身ゆえ人との接し方は知らなかったが、影丸との付き合いの中で、烏天狗の心は徐々に親しみと思慕を募らせていた。

【壺】を手に入れました。

・先へ進む…28

黒魔羅の迷宮

鷹助が雄将に土下座をしながら何度も何度も謝罪の言葉を叫ぶ。額が床に叩き付けられる鈍い音が何度も響き渡る。

「うつつうつつうつつ……。んっんんんぐおおおおお……!!しょ、小便の管の奥が……奥が痺れて……うほっほおおっ!!!な、何という初めての感覚……」

「ご主人様……申し訳ありません。拙者が……この鷹助が居ながらそのような痴態を晒させてしまいました……」

「うっ、はあっ!はあああああ……。た、鷹助、気にするでない。この先にあるであろう元凶を排除すれば……んっ!!こ、この魔宮も消え去るだろう」

「ご、ご主人様……」

「鷹助……お前たちがこの魔宮を打ち破ると信じて……信じ……つぎいいいい、んあああああつああああつ……!!逝くうううう……」

射精の快感に溺れそうになりながらも、雄将は先程とは異なる凛々しい口調で鷹助を激励する。鷹助を見つめる瞳は力強く、信頼と親愛の情が浮かんでいる。

「……………承知!この鷹助、必ずやこの魔宮を打ち破り、ご主人様を陽の下に……!!」

「頼むぞ、鷹助……っんっ!ふあああつ!そ、そして……影丸殿、鷹助を……頼みますぞ……」

「承知。……では行くぞ、鷹助」

影丸は扉をくぐり抜けると、気合も新たに奮起する鷹助を呼ぶ。強い足取りで鷹助も進む。二人の忍者は逞しい肉体美を気合と決意の鎧で身を包み、瘴気溢れる中へと消えて行った。

・瘴気の深層部く…44

魔宮の迷途羅魔鬼黒

「おいおい、儂の事を忘れて貰っては困る。一度は快樂に飢えた身なれど、まだまだ妖の長としても力を持っているぞ。何より、人間とは比べられない程に絶倫であるからな！」

腕組みをしながら自信たっぷりの表情で答えながら、老鬼は穴の前に立つ影丸の体を退かす。

生気を取り戻しつつある老鬼が床を震わせながら穴の前に歩み寄る。穴の大きさと自身の魔羅の太さを確認するように比較する。

「まさか、自分の魔羅を鍵に？」

「当然だ。助けられた恩もある。このままでは妖の長たる者の名折れよ。……儂の基地外魔羅が役立つのだ。喜んで鍵となろうではないか」

そう力強く言い返すと、鬼とは思えない柔和な笑顔を浮かべる。

魔羅を穴に挿入させる。太さは問題無く、尿道が押し開かれる感覚に身震いしながら亀頭を最奥まで挿入できた。

すると、尿道内部の鉄棒が突然小刻みに振動し始めた。魔羅を包み込むように大量の粘液が穴から溢れ出し、穴の側面が意思を持ったように妖しく蠢き出す。

肛門というよりも、熱い糊の中に挿入した感覚であり、更に糊が生き物のように魔羅を舐めては扱き上げる。

「ぐっ……ひぐおおおっ!!? はあ! はがあ!! はひいんっ!! んんんんっ……!!」

老鬼は齒を食い縛って天を仰ぐ。そのまま鉄棒を押し出すような勢いで濃厚な種汁を穴の中に噴き出した。

すると、射精の勢いに反応するかのように「罪が音を立てて開いた。少しずつ軋むような音を立てて、瘴気に包まれた場所への入り口が開いた。」

「お、おおお……い、今の内だ。儂が鍵役をしている内に、中へ……この魔宮の元凶へと進め！」

「……………忍としてでは無く、一人の雄として感謝する」

この淫乱な光景に、影丸は欲情しなかった。老鬼の身を呈した決意と奥から流れ込む瘴気の邪悪さが、影丸の忍としての感覚を研ぎ澄まさせる。

・【鬼】が仲間…36

・【烏天狗】が仲間…38

魔羅の迷宮

妖しく黒光りする壁が、左右から迫るようにそそり立っている。漆のように光沢のある漆黒が視界の全てを塗り潰している。

一直線に進む廊下は光源が無いにも関わらず明るく、濡れた影丸たちの筋肉の凹凸を強調するように陰影を作り出す。

頭上には天井の梁が微かに見える程に空間が広がっており、風切り音が妖怪の呻き声のように響く。

進めば進むほど禍々しい妖気が筋肉を刺激し、鼓動が高鳴り緊張感が走る。敵の気配は感じないが、それでも油断できない状況である。

得物が限られた状況下では不意打ちでも食らってしまったら、それだけで倒されてしまう危険性がある。

「……拙者と共に警戒を頼むぞ。それぞれ反対の方向を向く」

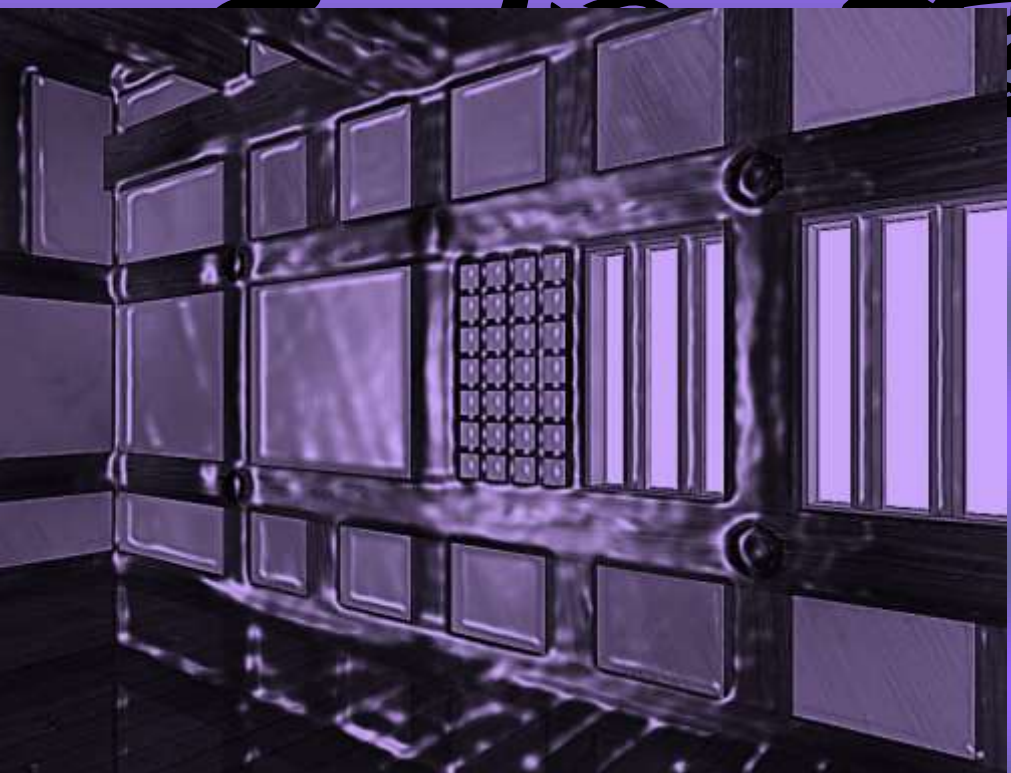
影丸は睨みを効かせて通路の先を凝視し、相棒も従うように背中合わせて警戒を行う。

・【鷹助】が仲間…29

・【烏天狗】が仲間…30

・二人ともこな…28

羅麻里の迷宮



左へ曲がり暫く歩いていると、通過の邪魔をするように小さな壺が通路の中央に置かれていた。余りに堂々と置かれた壺はある意味怪しい雰囲気を出しているが、別に封などはされておらず、中を覗いて見ても何も入っていない。

強い妖気を放つその壺は、警戒して触っても特に反応は示さずにただ静かに存在していた。

「……なんでこんな所に壺が……？ま、まあ魔剣の迷宮なら当然、なのだろうか？兎に角、持っていくに越したことは無いな」

【壺】を手に入れました。

・先く進む…27

迷宮の四魔黒

「ふむ、どれどれ……」

牢獄から救出したばかりの雄将が辿々しい足取りで穴に歩み寄ると、じつくりと中を凝視した。

「うむ、似たような絡繰りが大魔羅城に多く仕掛けられていたな。だが、これはちと厄介な……。一度挿入すると抜けないように内面にや隙間無く術式が刻まれておる」

「誰か犠牲にならないと駄目、か……」

「そうだ」

雄将は薄らと笑みを浮かべると、自身の人外じみた魔羅を軽く扱いて勃起させる。感度が相当良いのか溜まり過ぎていたのか、数回扱いただけで先走りが溢れ熟れた鈴口がヒク付く。

驚き制止しようとする影丸たちを尻目に、魔羅を穴に挿入させると一気に腰を打ち付けた。

「！お、おい！？いきなり何を……」

「！？んぐっ！ぐぎいい……。魔羅の中が、小便の管が擦れ……。お、おお……。！！」

勢い良く尿道の奥まで到達した鉄棒が自動的に振動し始め、穴の側面もまるで本物の肛門のように蠢き粘液を滲ませる。

丁度穴の奥底まで到達し、雄将の濃厚で優秀であろう種汁が尿道を押し広げながら穴の中を満たした。

すると、鼓膜を揺さぶるような重低音と共に「扉がゆっくりと開かれた。

これまで抑え込まれていた物が溢れ出るように禍々しい妖気が流れ出し、足元を這うように周囲に広がる。

「まさか、自分が犠牲になって鍵になるのか！？」

「この先には全ての元凶がいるだろう……。んっ、んあっ！！わ、私は性欲以外の力が衰えてしまっておる。あ、あああっん！！か、勝手に悪いが……。あっあっああっ……。た、頼むぞ……。！！」

「し、しかし……」

「あっひっふっんああああああっ！！しゅしゅーい強いのが私の魔羅おおおんっ！！早くいけえ！早く根源を断ち、私らを解放……。あっ！！はあああああああ気持ちいいいつ！！」

「……。分かった。すぐに片づけてくる」

・【鷹助】が相棒……31

・【七兵衛】が相棒……37

黒魔羅の迷宮

老鬼は複雑な表情で眉を潜める息子に向かって、掠れた声で激励する。

「む、息子よ……こ、こんな……無力な父を……つがぁ!! ゆ、許して貰おうとは、思わんだ、だが……」

「……ウッセエよ、この淫乱ジジイ。黙って種付けしてろよ」

「お、お前だけは……将来の頭に相応しい力を持ったお前だけは……必ず生きて帰って来てくれ……! あぎゅつつぁああう!! た、頼むう! お前だけは……お前だけは無事に……」

鬼が我慢ならないといった表情で老鬼に歩み寄ると、頬に向かって拳を全力で叩き付けた。魔羅は抜けなかったものの、何かが砕けるような音と共に老鬼の上半身が大きくしなる。

「……つウッセエって言うてんだろが!! オレがこんな……こんな安っぽい毘で死ぬ訳ねえだろが!! オレが本気で突っ込めばテメエの一人や二人位え楽に救えんだよ!! ……だからゼツテ死ぬじゃねえぞ!! テメエの腐った種汁から生まれた餓鬼の魔羅の味、後でじっくり味合わせてやらあ!! ! 覚悟しとけよ!! ……親父」

最後にそう小さく呟くと、扉の中へと全速力で突貫した。

影丸も横目で老鬼の姿を見ながら、漆黒の妖気の中へ消えて行った。

「……心配りません。息子殿は拙者が命を懸けて守らせて頂く。……では、御免っ!」

老鬼の表情は快楽に歪みながらも、どこか嬉しさに染まっていた。

・最深部く…44

老鬼の速魔羅

「……殿……かたじけない。某の魔羅が更に大きければ……」
「馬鹿言うでない。……己の力と技量、履き違えるで無い」

諭すように言うと、雄将は七兵衛の眼帯を軽くポンポンと叩いた。未熟さ故に残った傷跡が、古い痛みを思い出させる。

まだ七兵衛が幼かった頃、雄将の元に引き取られて寂しさのあまり毎日泣いて暮らしていた頃、それでも雄将の手厚い庇護と剣の修業によって日に日に元氣を取り戻した頃。多くの剣仲間たちと共に笑い共に鍛え合った頃。

そして……初めて雄将に筆おろしをしてもらい、その流れで多くの友人や知人たちと肉刀の挿し合いをした頃。

それらが走馬灯のように七兵衛の頭の中を駆け巡る。

今でも剣の勝負では十分に勝てない雄将であるが、同時に自身を育ててくれた父親として。またはそれ以上の感情を持っている。

そんな雄将を見捨てるような事に、七兵衛はどうしようもない無力感を感じていた。

「今の儂に戦う力は……んっ、んあっ!? はあ……な、無い。力ある者が……無き者を助ける……それが道理、だ!」

「しかし、某は……某は何と無力な……」

「んひっあひっああああ……む、無力ではない! お前が……七兵衛が助けたから……ひっあああああああんっ!! 七兵衛が救うと信じておるから、私はお前を先に行かせるのだ!」

「!? 某を……信じて……」

「そ、そうだ! お前なら道理を貫けると信じておる!」

「………承知、しました。必ずや、その道理を貫いて参ります!」

・瘴気の最新部く……44

迷宮の魔羅黒

「烏よ」

「?!ひ、ひゃい!」

老鬼から急に声を掛けられ、思わず翼を広げながら振り返る。黒頭巾で相変わらず表情は隠れているが、全裸で隠し様の無い体の動きで強く緊張しているのが手に取るように分かる。

「ふっふっふん……っ!は、ハハハ……そんなそそのような筋肉を持っているのに、相変わらずの小心者だな。その長い魔羅とデカイ金玉は飾りか?」

「!!?そんな事はありません!産まれも良くない我にとつて、この感度の良い隠微な体は私の唯一の誉れです!頭領様に快楽を与えるしか脳のない我で……」

「……………自信の無さも相変わらずだな……っん!んああああ……」

老鬼は鼻息荒く穴の中に射精し続け、痛みは完全に快感へと変化していた。今にも肉人形と化しそうな強烈な恍惚感に襲われながらも、強い眼差しで烏天狗を見つめる。

「……儂は、お前の実力は里でも随一だと確信している。もつと己を信じろ。お前は儂の慰み者だけでは無い。儂の有能な片腕として……んざいっ!!も、もおおおっ!!」

励ましの言葉に戸惑う烏天狗の前で、再び老鬼は全身を痙攣させた。

沸き立つ雄の妖怪の熱気と雄臭さが、禍々しい瘴気の間を縫って烏天狗の性欲を昂らせては魔羅を勃起させる。

「……た、たああつ、頼むぞ……我が片腕よ……!!」

「……しよ、承知!!必ずや頭領様を助け出して見せましょう。それまで今暫くお待ちを!!」

決意も新たに、股間の魔羅を大きく揺らしながら烏天狗は扉の中へと消えて行った。

・最深部く…44

黒魔羅の迷宮

取り敢えず、影丸は自身の魔羅を自慰行為で勃起させると、尿道に鉄棒が挿入されるように腰を穴に押し当てた。

尿道自慰は里でも行っていたが、鉄棒は予想通りに長く予想以上に太い。穴の最奥に亀頭が到達する前に先端が尿道の底に達し、同時に振動し始める。痛みにも似た衝撃が影丸の全身を駆け抜ける。更に、穴の内面が突如伸縮したかと思うと魔羅をしつかりと包み込み、意思を持ったように激しく抜き始める。分泌された粘液が何故か鉄棒を追いやるように尿道の中にまで注がれ、指が入りそうな程に広がり刺激される。

「ぐぎっ！ぐいっ！っ、これは拙者でも無理………イイツ！ハギイイイイイ！魔羅が！尿道が！壊れ………んっ！」

あまりに激しい尿道攻めに、思わず影丸は腰を引いて魔羅を脱いてしまう。

勃起して弾けるように穴から抜き出ると同時に、亀頭に大きく広がった鈴口から勢い良く液体が噴き出した。種汁ではない、無味無臭で透明な潮が鯨のように大量に溢れ出る。

ここまでの潮吹きに慌てた影丸は思わず亀頭を抑えるが、指の間から潮吹きが溢れてしまう。

「あっあっあっ止まらないでござる拙者の潮吹きが終わらないでござるう！中が擦れる潮の流れで尿道が感じる！あああああああ！！」

止まらない潮吹きで影丸が濡れて行くが、気付くと穴の真下に一本の鍵が落ちていた。穴の中に置かれた物が魔羅と一緒に引き抜かれたのか、それとも魔羅の挿入自体が原因なのかは分からないが、鍵にしてはかなり長い。

【鍵】を手に入れました。

・先く進む…15

迷宮の魔羅黒

魔人の魔羅を咥え続ける壺の中に瘴気が収束して行く。

壺に吸い込まれる瘴気に押し出されるように、魔人の濃厚な種汁が止め処無く溢れ出す。暴れ馬のように揺さぶられる魔羅から抜ける気配は全く無く、蛇のように変形した壺は執拗に種汁を啜る。種汁触手も本数を増やし、魔神の逞しい黒い肉体を弄ぶ。強い力で丰满な胸板の肉を搾り、魔人特有の雄乳を勢い良く溢れさせる。乳首を同時に搾れば勢いと同時に喘ぎも激しくなる。

太い触手は魔人の肛門を一気に貫くと同時に、逞しく割れた腹筋を破裂寸前まで膨張するように魔人自身の種汁を溜める。肛門と口の両方から種汁が逆流し、禍々しい装飾に囲まれた魔人の間は濃密な雄の臭いと火傷しそうな雄の熱気が充満する。

「グウウウウ……！二、人間ドモメ！コノヨウナ搦メ手でクルトハ……フギヤアアアア！！魔羅ガア……！！」

魔神は野太い雄叫びを上げながら壺を外そうとするが、あまりの快感に全身が痙攣しそのまま仰向けに倒れてしまう。

床の上で身悶えする度に肉と床がぶつかり、広がる種汁の海に大きな波紋が幾つも広がる。

「……？手の中が、熱い……？」

すると、弱った魔人の姿に反応するように影丸の握った拳が発熱し始めた。更には指の間からは光が漏れており、周囲の瘴気を打ち払うように光の筋が煌く。

拳を広げると、先程入手していた宝玉が掌の上で眩しいほどの光を放っていた。

「！何という力だ……。魔人の瘴気すら打ち払う、聖なる力……。これを魔人に使えば……！！」

影丸は宝玉を手には魔人の傍に歩み寄る。全身を種汁塗れにした魔人が眩しい光に気付くと、慌てたように声を張り上げる。

「！？ソ、ソレハ封印石！！貴様ラアアア……！！」

【封印石】……………ならば、もう悩む必要もあるまい」

宝玉の輝きが一層強くなる。光が魔人の大きな体を盡くこと包み込むように拡がり、心無しか魔人の姿が歪んだように見える。

影丸がゆつくりと封印石を魔人の体に押し当て、叫ぶ。

【封印石】よ！魔剣・黒魔羅に巣食う邪悪な魔人を、その終わり無き快樂と共に封じ込めよ！！」
「や、ヤメロ！！ヤメロオオオオオ！！イヤダ！！イヤダアアア………！！」

強烈な閃光と風が影丸と魔人、そして相棒の三人を弄ぶかのように巻き起こる。思わず体が吹き飛ばされそうになるが、目を細めつつも強い意思と雄々しい肉体で持ち堪える。

断末魔と共に魔人は光の繭に取り込まれ、そのまま封印石の中に吸い込まれた。

封印石は以前と全く同じ姿で掌の上に静かに鎮座している。掌を焦がすような熱も、無い。周囲を見ても、禍々しい瘴気は完全に消え去っており、空気が浄化されているのが分かる。

「……………終わった、か。…………ふう」

影丸が相棒と顔を確認しながら小さく呟き、そして安堵の溜息をした。

宮

- ・【鷹助】が相棒…48
- ・【七兵衛】が相棒…46
- ・【鬼】が相棒…47
- ・【烏天狗】が相棒…43
- ・【鎮外】が相棒…66
- ・【銀太】が相棒…69

- ・【勾玉】を入手している…65

「デハ早速頂クトシヨウ。迷宮ニ挑ンダ、豪傑タチノ子種ヲナ!!」

魔人はその筋肉の塊のような大柄な体に身合わず、影丸たちの反応以上に素早く詰め寄った。

「?っ!速い!」

勢いそのままに影丸に体当たりをして体を壁まで吹き飛ばしてしまう。

壁に強く叩きつけられ影丸に強い衝撃が加わる。全裸のまま叩き付けられた肉体は傷付き、体の中から砕けるように聞こえてしまう。驚いた相棒の気遣う叫び声が遠くに聞こえる。

「ぐっ……がはぁ……!」

不意打ちで体を壊して床に倒れた影丸に、魔人が素早く近付く。そして、影丸の股を大きく広げるとその魔羅を金玉ごと咥え込んだ。

鋭い牙と長い舌が痛みを伴いながら口内で執拗に魔羅を愛撫し、粘り気の強い涎がカリ首の裏から尿道の仲間で浸透する。

「ムグ、ムフウ……オオ、何ト濃厚ナ雄ノ子種ヨ。コレナラバ、我輩ノ分身ヲ創ルノモ容易ダ」

「あん……あぁん……ぶ、分身、だと……!」

影丸の体を囲むように瘴気が集まって来た。それが収束すると複数の黒い影が生まれた。黒い影は姿こそ魔人と瓜二つであるが、目に意思は感じられずただ荒い吐息とそそり立つ魔羅を大きく揺らしていた。

「サア!!新シイ肉奴隷ノ儀式ヲ始メルゾ!!影ヨ!!皆デコノ雄ドモヲ手箆メニスルノダ!!」

「なっ!!」

影丸も何とか抵抗するが、負傷した身体では全くの無意味であった。

魔人とその影達は妖しく甲高い声を上げながら影丸の体に覆い被さって来た……。

「ひゃひいいい!はひいゝあつひいいいんっ!魔人しやまのお魔羅最高れしゅうう!!」

あれから何日経過したのだろう。影丸には分からなかった。分からうともしなかった。

魔人の立派な肉人形と化した影丸は、今日も全裸で魔人の股間に腰を下ろしていた。極太の魔人の魔羅が締まりの無くなった肛門に挿入され、影丸は悦びながら腰を上下に動かし続ける。接続部には白く泡立った腸液が大量に溜まっており、肉同士がぶつかると弾ける音を響かせながら泡が散る。

真赤に勃起した魔羅は左右から影に扱きあげられ、魔人の体を真っ白に染めるように大量に射精を

続けている。

いつの間に改造されたのか、大きく膨れた乳首からは雄乳が勢い良く漏れている。濃厚な甘味を持つそれを、左右の影が扱きながら美味しそうに啜る。

「フンッ！フンッ！良い塩梅ニ狂ッテキタナ。忍者ノ黒頭巾ガヨリ滑稽ニ見エテクル」

影丸の黒頭巾はそのまま残されているが、口元の涎跡や脳天の種汁跡を始めありとあらゆるいやらしい液体が染み込んでいる。鼻がもげる程の臭気を漂わせ、中は雄の熱気で充満し涎と鼻水と汗が止まらない。

忍者としての鋭い牙眼光は完全に失われ、焦点の合わない瞳で虚空を見つめながら喘ぎ続ける。

影丸から少し離れた場所では、相棒であったもう一人が魔人の影達に犯されていた。

淫らな体位で魔羅を何本も受け入れ、執拗に種汁を欲する。逞しい肉体は体液で雄臭く汚れ、呂律が回らないまま淫語を言い続ける。

魔羅と乳首から雄の白濁した体液を惜しげも無く溢れさせ、影達の果てる事のない性欲を見たし続ける。

「便所ノ時間ダ。奴隷同士仲良ク糞尿ヲ捻り出セ！我輩タチノ糞尿ヲ浴ビナガラナ!!」

「は、はいい……ご主人さまあ……」

引きずられるように影丸たちは部屋の片隅に座らされ、互いに顔を見合わせながら中腰になる。変わり果てた相棒の姿。種汁を垂らし続ける魔羅。雄乳を噴き出す乳首。悦楽に染まり恍惚の笑顔を浮かべる顔。

あの頃の記憶は微か遠くに消え、今や互いに性処理の道具として扱っている。

「サア！漏ラセ!!」

その瞬間、二人は下半身に力を入れた。

相手の顔面にかかる程に勢い良く放尿し、悦びながら大量に脱糞した。

水気を帯びた生々しい音と共に頭上から魔人たちの糞尿が落ちて来る中、影丸は呟いた。

「ああ…最高、だああ……!!」

ゲームオーバー

・後編開始に戻る……」

黒魔羅の迷宮

「グガアアア……我輩ノ魔羅ガ……種汁ガアアア……!!」

巨大化した壺は魔人の魔羅を全て啜え込む。まるで生き物のように表面が波打ち、魔人の背中を反らせ腰を持ち上げる。

壺を破壊しようと上腕筋を数倍に膨張させて両手で力強く握り潰す。食い縛った鋭い牙を剥き出しにして、全身の血管を浮かび上がらせる。その姿は魔人と言うに相応しい凶暴さを露にしていた。

だが、そんな抵抗を嘲笑うかのように壺は魔羅を包み込む。次第に魔羅に吸い付くように形を変化させ、エラを広げたカリ首や大きい鈴口、棍棒のように剛直な幹の形が明瞭に浮かび上がる。

その上、溢れ続ける種汁が流れる軌跡も壺の表面に浮かび上がる。ヒクつく鈴口から噴き上がり幹を伝う勢いのある種汁が、網の目のように全面に広がり根元から溢れ出す。

毛玉と化している黒い金玉が白い種汁で汚れ、抜くために腰を引いて魔羅を暴れさせると大きく揺さぶられ種汁を撒き散らす。

「……………っ！拙者も、我慢出来ない……………!!」

異形の魔人の乱れた痴態が続く中、影丸と相棒の呼吸は激しく昂り魔羅が急角度でそそり立つ。自然と互いに相棒の魔羅を凝視する。そしてどちらからとも無く視線を合わせると、静かに相棒の魔羅を驚掴みした。涎で滑りを与えた指先で考える限り淫乱な動きをし、亀頭を弄くり幹を扱き上げる。

「ああ……………もつと、拙者を扱いてくれ……………もつと、もつと、欲しいでござるう……………」

すがるような視線で相棒に視線を向けると、相棒も蕩けた表情で頷く。抱き合ったままその場に倒れ込むと二人の行為は激しさを増す。

魔羅から噴き出る種汁を全身に浴びて筋肉に塗りたくる。混ざり合った種汁の雄臭が鼻腔に流れ込み心臓の鼓動を強める。

滑った体を擦り付け合い種汁を垂れ流しながら互いの唇を貪る。互いの舌が絡み合い涎が注がれる。雄々しい肉体の熱と硬さに同じ雄として興奮し欲情する。

二人の頭の中には最早魔人の事は無くなっており、眼前でヨガリ狂う筋骨逞しい相棒を犯す事しか考えていなかった。

だからこそ、魔人の異変に気付かなかった。

「グゴオオッオ……………!!ハ、ハヒイイイ……………モ、モウダメダアアア!!全部……………搾ラレルウウウウ……………!!」

焦点を失った目で虚空を見上げて狂ったように不気味な笑顔を浮かべる。垂れ流しのままの涎が顎を伝い魔羅を啜える壺にかかる。

そして、鼓膜を揺さぶる程の大きな雄叫びをあげて腰を最大限に突き出すと同時に、気を失いその

まま仰向けに倒れてしまった。

次の瞬間、小さな音と共に壺にヒビが入ったかと思うとそのままヒビが全体に走る。ヒビが完全に広がるやいなやその隙間から光が放たれる。その光が中から押し出すように大きな音と共に壺が割れてしまった。

壺の中から出て来たのは自身の種汁で濡れた魔人の巨根と、大量の種汁。

それは正に種汁の洪水であった。栓が抜けたように爆発的な勢いで溢れた種汁は、動かない魔人の体を一瞬にして飲み込んでしまった。

絡み合っていた影丸たちをも飲み込む程に部屋を満たす。迷宮全域を種汁の激流で浸水させて行き、生暖かく白濁の世界に一変させる。

その後、影丸たちの行方を知る者は居なかった。

ゲームオーバー

・後編開始に戻る……」

迷宮の四魔羅黒

戻り始めた意識の中で、影丸は柔らかな熱に包まれていた。どこか優しさを感じるような心地良い温度で、鼓動が子守唄のようで安心感が全身に広がる。耳慣れた声が聞こえて来る。何処か不安そうで震える声が影丸の意識を覚醒させる。

「……影……ど……げ丸ど……丸殿！影丸殿！」

鼓膜が破けそうな大声で名前を呼ばれ、影丸は漸く意識を取り戻した。

まず視界に入ったのは薄暗い木目の天井。そして自分に抱き付いている黒子頭巾の雄。

顔を肩に埋めて強い力で抱き締める雄の背中には大きな黒い翼が生えている。影丸の体を守るように広がり覆い被さっている。

「……無事だった、か……」

「影丸殿お！良かったあ……。もしあなた様が死んだら……。う、ううう……」

「お、おい、泣く事は無いだろう。こうして無事に……。ん？これは……！」

右手を持ち上げて拳に握られた物体を見る。光を吸い込むような漆黒の柄に種汁以上に白い白銀の刀身、握るだけで感じ取れる膨大な妖気……

『黒魔羅』……！』

「そうだ。儂らは脱出出来たのだ。……主らの活躍でな」

視線を上げると、魔人の間への鍵となっていた筈の老鬼がいた。疲弊した体を労りながらも笑顔で抱き合う二人を見下ろしている。

魔羅は力無く垂れ下がっているが、先走りを滴らせながら大きく開いたままの鈴口は、紛れもなく鍵の役目を果たしていた事を示している。

「！貴方も無事でしたか。それは良かった……」

「まあ良かったは良かったが、まさか儂の片腕が別の雄に惚れてしまうとはのお。いやはや悲しいやら嬉しいやらじゃな。烏は意識の戻らないお主を必死に抱いて温め続けた上に、喉が枯れるまで名前を……」

「と、頭領様！」

露骨に言われたのが恥ずかしかったのか、烏天狗は老鬼に飛び付いて口を塞ごうとする。だが老鬼は逆に烏天狗の足を引っ掛けて転ばせると、既に勃起していた魔羅を力強く握った。

「あんつ！と、とうりよお、さまあぁ……」

「こんなに勃起しながら抱き付きおって、好きでない訳が無かろう。……影丸殿、此方へ来てくれんか」

老鬼に言われ仰向けで魔羅を扱かれている烏天狗の横に膝を付く。

老鬼の魔羅の迷宮

すると、老鬼は烏天狗の黒子頭巾の前垂れ外そうとする。

「え、ちよっ……頭領様あ…か、顔を見られては……」

「問題無かるう。顔を見せるのは『自分が心より愛した者』だけじゃろ。儂然り、影丸殿然り、だ。違うか？」

「……確かにそう、ですけども……」

「儂は暫く休ませて貰う。その間お前は影丸殿の里へ行き修行して来るが良い。妖怪と忍の交流は敵対ばかりではないからな」

老鬼の大きな指が烏天狗の素顔を露にする。

……妖怪らしく無い精悍な雄らしい顔付きだが、真つ赤に染まった顔と涙に潤んだ瞳が不釣り合いに見える。

そして、その視線の先には驚きながらも愛おしそうな視線で見つめる影丸の顔があった。

気付けば、影丸も黒頭巾を外して自分の顔を晒していた。

影丸の里にとっては、志が同じ雄ならば人間も妖怪も関係無く暮らしている。

老鬼の言葉に多少は驚いたものの、それ以上に烏天狗と長く暮らせる事に嬉しさを感じていた。

影丸は黒魔羅を鞘に戻すと、顔を烏天狗に近づけて呟くような声で言った。

「……里でも宜しく頼むぞ。相棒」

そして、始めての接吻をした。

互いに抱き合いながらの長い接吻であった。

接吻をしながら烏天狗が上半身を上げると、黒い翼が嬉しさを表すように大きく左右に広がった。

影丸はその時だけ、黒い色が優しくも愛しく感じる色に見えたのだった。

GOODEND『素顔も愛った』

了

黒魔羅の迷宮

行く手を遮るように瘴気が充満している。扉を抜けて侵入したは良いものの距離感覚が無くなる程に視界が悪く気配を探るのも容易では無い。

だが、強まる妖気は間違いないこの奥から流れて来ている。この先に迷宮の主が居る。それを倒せば無事に脱出出来るだろう。

瘴気を吸い込まないように手で払いながら、影丸は大声で叫ぶ。

「そこに居るのは分かっている!!この影丸が相手をするでござる!!」

突然前方から強風が吹いた。飛ばされないよう姿勢を下げて足に力を入れる。

瘴気が消え去ると同時に問い掛ける声が聞こえて来た。異様に低く野太い声で、空気を揺るがすような高圧的な声だった。

「ホウ、我輩ノ迷宮ヲ進ミ、コノ『魔人ノ間』マデ辿リ着クトハ中々ノ雄力ノヨウダ」

声の主は影丸たち同様に全裸で屈強な肉体を惜しげも無く見せ付けていた。体格も大きく、人間は愚か下手な妖怪を圧倒する程の強い妖気を全身から放っている。

全身が紫色の肌に覆われ、鋭い瞳と鋭い牙、鋭く尖った角が額から伸びている。『でえもん』という西洋の妖怪に似ている。

だが、何と言っても股間からダラリと垂れた魔羅の存在感が影丸たちを圧倒する。

ズル剥けの亀頭は人間の頭程に大きく、幹のあまりの長さに今にも床に付いてしまいそうになっている。表面の血管一本一本が生きているように激しく脈動し、猛烈に濃い陰毛から血液を送っているように見える。

金玉の大きさも想像以上であり、あまりの大きさにそのまま根元が切れてしまいそうだ。こちらにも目に見えるほどに太い血管が網の目上に広がっており、それを隠すような剛毛が雄臭さを強調する。

「ガハハハ！ソウトモ！我輩コソ魔剣・黒魔羅ヲ支配スル魔人デアルゾ！」

「拙者は影丸。魔剣・黒魔羅を里に持ち帰り封印するためにやって来た。貴様を倒せば黒魔羅を束縛する異常な妖気も収まるだろう。……覚悟!!」

そう鋭い口調で啖呵を切ると、影丸たちは戦闘体制に入る。

だが、魔人は特に慌てる様子も無く寧ろ余裕を感じさせる態度で笑う。

「得物モ何モノイ、全裸ノ雄狂イ共ニ我輩方倒セル詔ガ無いダロウ!!サア!大人シク、我輩ノ肉奴隷ニナルガ良イ!!」

「くっ……!!(このままでは……!何か、何か無いのか?!あの魔人に対抗出来る手段は……!)」

・【壺】を入手してこ…45

・【壺】を入手してこ…41

「ガハハハハ！ソノ雄々シイ強欲ナ魔羅ヲ我輩ニ……！？ナ、何ダソレハ？」

今まで高圧的だった魔人の態度が急変する。影丸が持つ『ある物』に対して驚く様に退く。

一瞬影丸も戸惑うが、魔人の視線の先が自身の傍に向けられているのに気付くとその『ある物』を両手に持ち変える。

「壺が、仄かに輝いている？妖気も……いや、妖気とは違う力が……！」

迷宮内で拾った小さな壺が、影丸の手の中で徐々に輝きを増して行く。

魔人の間に漂う瘴気を打ち払うように光の筋が放たれ、初めとは比較にならない程の膨大な力が放出される。

何も手立てがない今、この壺に頼るしか無い。影丸は意を決して壺を頭上に掲げる。

「頼む！魔剣に巢食う悪しき魔人の討伐に力を！」

影丸の呼び掛けに応えたのか、壺は目が眩む程に一層輝きを強くする。そのまま手から離れるようにゆっくりと浮かび上がると、何故か意思を持ったように高速で縦回転を始めた。

そして、回転が止まりそのまま突進して魔人に向かうと、巨大な魔人の魔羅を咥え込んでしまった。

「ナ、何ヲスルツモリダ！？コ、コンナ小サイ壺ニツデ我輩ガドウナル訳ガ……！」

壺はそんな魔人の言葉に反抗する様にキツく亀頭を咥え込んだ。

そして、信じられ無い事に壺が徐々に大きさを増して魔人の魔羅を飲み込もうと変形し始めた。

魔羅を型取りするかのように壺は口を広げ、巨大な水差しのように長く太く変形する。

遂には戸惑う魔人を尻目に、壺は人外だからこそその巨大な魔羅を全て咥え込んでしまった。

次の瞬間、魔人の魔羅は突然の快感に襲われた。

「！？ナ、何ヲスル！！我輩ヲ馬鹿ニスルノ……ヒグウツ！！アガッ！アヒイツ！！セ、先端ハ弄ルナア！！ソナ速ク扱イタラ……ッア！！アアアアアアアアッ！！？」

両膝をガクガク震えながら、魔人は腰を突き上げて壺に犯される魔羅を影丸たちに向ける。

淫らな喘ぎを漏らし始めた口からは牙の間を通り涎の糸が引き、紫の厚い胸板をネットリ濡らす。鋭い眼光も虚ろに視線を泳がせては、恥ずかしがるように天を仰ぐ。

そして、壺の口の隙間、つまり魔羅の根元辺りからは白濁した種汁が溢れ出てきた。陰毛樹海を押し流すように白い洪水が下半身を汚し、金玉を生臭い真珠のような姿に変える。

・【宝玉】を入手して……40

・【宝玉】を入手して……42

「……んっ………はっ……あふっ」

混濁とする意識の中、影丸は口元に何か違和感を感じている。とても柔らかい物が唇を塞いでいるが、少しの喘ぎ声と共に大量の空気が流れ込む。

空気は若干生暖かく生臭い。同時に粘り気のある液体と柔らかく動く物体が舌に絡み付く。

その濃厚な口への刺激に意識を戻すのと同時に、呼吸が荒くなって股間に全身の血液が集中する。

「んっんっんっ………んあ……ああ？………？……？……んぽおっ!!？」

「んあんっ………っ!!？か、影丸殿!!影丸殿某が分かりますか!!？七兵衛です!!『まうすちゅーまうす』の効果がこれ程とは……!!」

「し、七兵衛か!!ま、魔人は？魔剣は？七兵衛の主は……」

「心配するで無い。僕はここにいるぞ」

影丸が上半身を起こして視線を向けると、全裸で胡座をかく雄将の姿があった。

鍵として使われた巨大な魔羅は胡座の中からハミ出しているが、未だに閉じていない鈴口の大きさが攻めの強さを表している。

「魔剣も……ほれ、手の中に……」

何かに気付いたように視線を向けると、そこには意識せずに力強く『黒魔羅』の柄を握っている自身の右腕があった。

妙に手に馴染む漆黒の柄に白銀を越えて白一色に輝く刀身を持つ魔剣が、静かに握られていた。周囲を見渡しても瘴気は漂っておらず、微かな妖気だけが刀身から放たれている。

「……そうか。七兵衛、かたじけなかった。拙者の任務に巻き込んでしまつて」

「いえ！全ては某の意思故、影丸殿に非は一切ありません！……某は、己の信ずる道に、武士道に従つたまで」

直接礼を言われて恥ずかしいのか、七兵衛は頬を紅潮させて顔を背ける。だが、そこに雄将が笑いながら追い打ちをかける。

「ガハハハッ!!『まうすちゅーまうす』に託けて接吻を続けた変態は何処の誰だ？接吻したまま種汁をジョージョー漏らした淫乱は誰だあ？」

「と、殿!!そ、それは……」

「全く、主が許しとるんだ。影丸殿と種付けし合いたい、影丸殿と共に修行をしたいと正直に言えば良からう。僕はそこまで心が狭くないぞ」

影丸が七兵衛の股間を見ると、確かに硬く勃起した魔羅が大きく揺れていた。溢れた種汁も相当多かったらしく、亀頭や幹は勿論陰毛や金玉まで白く汚れている。

ふと、自身の股間を見れば接吻に興奮したのか同じように勃起していた。先走りが鈴口を押し広げ

ながら溢れ、大きなカリ首が物欲しそうにエラを広げる。
ふと、雄将との会話に興じている七兵衛の手首を掴みそのまま自身の魔羅を握らせた。その上から影丸自身が両手で掴み離れないように強く力を入れる。

「一人だけで種蒔きして狡いぞ、七兵衛殿。……拙者も種蒔きしたくて魔羅が疼いてしまったでござる。……共に種蒔きも、種付けもしたい」

「か、影丸殿……良いの、ですか？」

「何を今更。……互いに痴態を見せ合い犯し合った仲ではないか。今度は、一人の雄として絡み合いたい。だから……」

言い終わる前に、七兵衛は影丸の魔羅を激しく扱き始めた。同時に影丸の腕を掴んで自身の魔羅を濁らせる。

そして、二人同時に魔羅を扱き合いながら先程の濃厚な接吻の続きを再開した。今度は影丸も積極的に舌を絡め涎を注ぎ、隠微な水音を上と下から同時に響かせる。

行為は徐々に激しさを増して行く。一人が股を広げ肛門に指を突っ込むともう一人が舌を挿入させる。そこから肛門に魔羅を挿入し発情した家畜のように鼻息荒く腰を振る。肉のぶつかり合う響きの良い音が連続して聞こえ、野太くも雄々しい喘ぎが大きくなる。

タガが外れて互いに種汁を注ぎ合う二人の姿を見て、雄将は勃起した自身の魔羅の亀頭を舌で舐め回しながら小さく呟いた。

「んっ、んあ……。影丸殿の里との協力関係も悪くは無い、か。久し振りに実入りの良い政務になりそうだ」

GOODEND 『戻った侍の恋ごころ』

了

魔羅の迷宮

白一色の視界が黒一色に染まってどの位の時間が経過しただろうか。混濁した意識が覚醒し始め、五感が徐々に戻り始める。重い瞼を少し開け木目の天井が見える。視界を遮るものはなく、薄暗い天井が静かに見下ろしている。

（……………戻って、来れたのか）

体を起こそうと手に入れると何かを掴みだすことに気付いた。仰向けのまま視線だけを下げると、手に刀を握っていた。

見間違える訳が無い。魔剣・黒魔羅がその種汁の如く白濁し輝く刀身を剥き出しにしていた。以前感じた妖気は弱まっており、握ったままでも問題はなさそうだ。

「あっあっあっ……親父iiiiii！親父の口ん中熱くて、蕩けちまいそうだあ……!!」

鬼の声が付近から聞こえた。黒魔羅とは反対側に視線を移すと、鬼と老鬼が座っていた。

だが、父親の老鬼が息子である鬼の巨大な魔羅を頬張っていた。大きな口を使って魔羅を根元まで一気に啜え込んで、頭を上下に動かして荒々しく奉仕していた。

息子は普段の傲慢な態度から一変、初めて味わうであろう実の父親の涎の熱さや舌捌きに呼吸を荒くして身悶えている。自ら腰を動かしては中に種付けをし、その大量さで父親の頬を大きく膨らませた上に胃の中に流し込んで行く。

だが、父親は喉を鳴らしながら一滴も種汁を零す事なく飲み干した。その表情は切なさを浮かべた息子とは対照的に、満足したような笑顔を浮かべていた。

「んぐっごぎゅごぎゅごぎゅ……んはあ……そんなに悲しそうな顔をするな。これからは儂が里を率いてやる。もうお前たちには苦労はかけないし、何処にも行かない」

「はあっ！はあっ！違えよ親父！一緒に……里に帰ったら………もう、もう親父とこんな風に出来なくなる。親父の魔羅も、肛門も、雄っぱいも、全部触れなくなる……!」

「……………」

「俺……後を継げば嫁もらって餓鬼を産まないとならない。だから……雄と関係持てば……嫌われちまう。里の皆にも、嫁にも……」

「だから、ずっとここで二人だけで……いや、影丸殿と一緒に三人で暮らしたいのか？」
「分かんねえ。でもよお…………」

泣きそうな声をしながら立ち上がると、鬼は老鬼の勃起した魔羅が肛門に刺さるように股を広げると、そのまま一気に腰を下ろした。

息子の肉厚な内壁に強く締められた魔羅は激しく脈動し、蠢く内壁によって強烈な快感を覚える。眼前で雌のように喘ぎ身悶える息子の汗塗れの筋肉に興奮して腰を突き上げれば、難無く前立腺を捉える事が出来た。

息子も父親の燃え盛るように熱く引き裂くように太い魔羅で犯され、それだけで射精してしまった。その上前立腺をゴリゴリ刺激され父親の嗜虐的な視線に、思わず身震いして喘いでしまう。

黒魔羅の迷宮

「はんっ！はあんっ！！親父とお！親父とずっと一緒に……一緒に過ごしてえよお！！血とか地位とか関係無しに親父に犯されてえよおお……！！」
「んんっ、んんぐおお！こ、これだけ尻が大きければ流石に中也キツイな。……気にするな。里にも儂等と同じような雄が数え切れん程いるぞ。長も別に血縁は関係無い。強く気高く慕われる妖が長になるのだ」

「でもよお、里の皆はオレがなるのが良いって……」

「儂はまだまだ死なん！お前の代になる頃にはお前よりも優秀な奴が出て来るだろう。儂も、お前一人に全て押し付けてしまったからな。お前の自由に生きて欲しい。そんな所だ」

「……………親父」

息子は父親に抱き付くとそのまま肩に顔を埋めた。そして、耳元でこう呟いた。

「……………ありがとな。大好きだぜ、親父」

鬼の親子による近親相姦は激しさを増して行った。響く喘ぎに湧き立つ雄臭、絡み付く熱に溢れる体液。水音が理性を崩し肉音が雄の本能を一層激しくさせる。

そんな親子の営みを邪魔しないように、影丸は気絶したフリのまま倒れ続けた。

……触れずとも魔羅を勃起させ、種汁を噴水のように溢れ出しながら……。

GOODEND『親子の絆』

了

迷宮の魔羅

気付くと、そこは元の小部屋の中であった。影丸と鷹助が黒魔羅を見付けたあの小部屋であった。禍々しい瘴気も、恐ろしい妖気も消え去っており、ただ静かに黒魔羅が床に突き刺さっていた。

「ん、んんっ……………ここは…………？」

「鷹助！目が覚めたか、大丈夫か？」

「！し、師匠！？せ、拙者は大丈夫ですっ！それよりもご主人様は…………？」

「お前の早とちりは未だに直ってないようだな。まだまだ修行が必要のようだな」

背後から急に聞こえた声に驚いて振り返ると、肩で息をする雄将が壁に寄り掛かって座っていた。魔羅は完全に萎えているがそれでもその大きさは凄まじく、鯉の口のように伸縮する鈴口から滴る先走りは、床に水溜りを作る。

「ご主人様！ご無事でしたか」

「それはこっちの台詞だ。影丸殿は兎も角お前はまだまだ未熟者だからな。足を引つ張ってないかと心配で心配で…………」

雄将は若干視線を逸らして恥ずかしそうに、だがはつきり聞こえる大声で叫んだ。

「……………お前が影丸殿に取られないかと、ヒヤヒヤしておったわい！儂も良い歳なのに嫉妬してしまったわい！！」

「へ！？と、頭領様！！た、確かに拙者は影丸殿に惚れて……………い、いや！尊敬していますが、だからと言って…………」

必死になって否定する鷹助だが、その目は不謹慎にも雄将の立派な魔羅を凝視していた。久し振りに見た仕える主の、長年奉仕を続けた魔羅から視線が外せない。

だが、頭の中では影丸の刀のような切れ味鋭い魔羅が浮かんでしまう。同じ忍として桁違いに雄々しく艶やかな魔羅に、鷹助の心は揺れてしまう。

実際、二本の魔羅に囲まれて鷹助の魔羅は既に最大に勃起してしまい、言い訳を考える間にも身震いをしながら先走りを垂れ流している。

「……………ガハハハハッ！！冗談じゃよ冗談！やはり相変わらずお前は真直ぐで純粹じゃなあ。人としては良いが忍びとしては如何せん未熟なままだ。…………影丸殿さえ良ければ、里の方に修行に出してやりたいんだがなあ…………」

思わず鷹助が目を大きくする。信じられないという思いが明らかに表情に出ており、戸惑った様子で影丸と雄将の顔を何度も見返す。

突然の言葉であったが、影丸は特に困惑していなかった。鷹助の下心や決意も、雄将の気遣いにも気付いていたが、何より影丸自身が我慢出来なかった。

影丸は戸惑う鷹助の背後から強く体を抱き締める。鷹助の体が棒のように硬直し震えているのがよ

く分かる。昂ぶる鼓動が鷹助の純粹さと困惑加減を伝える。

軽く腰を押し付けければ、勃起した魔羅が鷹助の尻の谷間を捉え、難無く亀頭が肛門へと辿り着く。

「あ、当たってます！師匠の……魔羅が、拙者の肛門に……！」

「……承知。この影丸、微力ながらこの未熟な忍である鷹助の修行に付き合います。暫し体年里にお借り致しますが、構わないでござるか？」

「……ただ二つだけ条件がある」

いきなり声を低くし威厳ある口調で呟くと、雄将は二人に歩み寄り鷹助の目の前に立つ。そして抱き付く影丸の腕を軽く払うと、鷹助の体を内腿を掴んで持ち上げ、開いた肛門に自身の巨根を容赦無く挿入した。

突然の挿入に鷹助は全身を痙攣しながら叫ぶが、その表情は明らかに恍惚の快感に染まっていた。体が揺さ振られれば艶めいた喘ぎを漏らし、勢い良く種汁と腸液を床に噴き出す。

「あひいっ！とうりよおさまああ……んっ！んあ！んあああっ！！拙者の奥が削れて感じるううううう！！」

「一つは一定期間を置いて、鷹助を含めた忍たちを我が城に向かわせよ。そこで修行の成果を見せるように。無論、『雄の修行の成果』をな」

「承知。他の城でも似たような任務を遂行している故、問題は無いでござる。同好の主たちにも知らせましょう。主同士交わるのも良いものかと」

「おお、それは良いな。……そして、もう一つは……」

雄将は喘ぎ狂う鷹助の肛門に魔羅を挿入したまま、その挿入部分を影丸に見せつけるように腰を突き上げた。

「……この未熟者に、二本挿しの素晴らしさを教えてやってくれ。さあ、思う存分種付けしてくれ」「しよ、承知」

「ああ……あ、有難うございますう、ごしゅじんさま……ししよおおおお……！せつしやのこうもんを……腹ん中をぱんぱんにして下さいい……」

こうして未熟な忍者、鷹助はまた一つ『雄の階段』を昇る事が出来たのだった。

GOODEND 『修行仲間』

了

黒魔羅の迷宮

右に進むと、扉が目に入った。
その扉には掌大の石が嵌め込まれており、見る角度によつてさまざまにあ煌めき美しい輝きの軌跡を内包しているようだ。

警戒しつつ指先で軽く触れつつ、試しに掴んでみると難無く外れてしまった。

重さはそれほどでもないが、溢れる力がどこか安心感を与えてくれる。自分の身を守ってくれるような安心感に。

少なくとも害を与えるようなものではないのは確かだ。この迷宮の中ではかなり珍しい発見になっただろう。

「微かに妖気……いや、何か別の力を感じる」

【宝玉】を入手しました。

・先く進む…27

迷宮の四魔黒

「鎮外殿、怪我はないか」

「……ん……むうう……う、うう……」

影丸の声に反応はしているようだが、意識を取り戻す気配はない。重症ではないものの無事と言う訳ではないようだ。

だが、この迷宮を調査するに鎮外の力は不可欠である。このまま置いて行く訳にもいかないが、あまり時間を取られては後々取り返しのない事態になる可能性もある。

「着付け菓でもあれば良いのだが、他に何か方法は……」

考え込む影丸を知ってか知らずか、表情を歪めながら呻き声をあげる鎮外は、一度大きく寝返りを打った。

すると、横向きだった体は四肢を投げ出すような大の字の姿勢で俯せになり、肉厚な胸と腹、そして魔羅が姿を現した。丸坊主の頭とは違い股間周りには鬱蒼と縮れた陰毛が生い茂っており、瘴気にも負けない程の生臭い臭いが沸き立っている。

これまで何人の修行僧や武士に種を仕込んだのだろう。魔羅は既に真っ赤に腫れた状態でギンギンに勃起しており、呼吸をするように鈴口を伸縮して疼いている。

「……………」

思わず影丸の視線が魔羅に釘付けになる。誘う様な鈴口の伸縮にと揺れに惹かれ徐々に顔を近づけていき、口を覆う頭巾を少しずらして無精髭の残る口元を露わにする。

そして、龟头と接吻するように強く押し付け味を確認する。

予想通りの濃厚な苦さ。鼻腔を刺激する雄臭さもむせ返っている。

すると、影丸は鎮外の股の上に跨る様に移動すると自身の涎で肛門を解すように指先を挿入した。久しぶりの肛門自慰に思わず小さく喘いでしまい、先走りの量も多くなってしまう。

解し終わるとそのまま腰を静かに下ろしていき肛門と鎮外の魔羅が重なる様に位置を調整する。

そして、一度生唾を深く飲み込んで意を決すると、自重に任せて一気に腰を下ろした。緩んだ肛門に突き挿さるように、勢い良く魔羅が飲み込まれた。

「はあっ！はあっ！はあっ！ああああっ！！ふ、太……ああ、な、長あ……！！は、腹の中まで焼け付くように、熱い……っ！あ、ああでもこれだ……拙者が欲しいのはこの感触……。この雄々しい巨大さに……あ、あっあっあっあっあっ熱さ、が気持ちい……っ！！」

「……う、うんっ……んあ……ああああ、あっ、あっ、あっ……」

鎮外の広がった体が確実に反応し、時折小刻みに痙攣する。股間に茂る陰毛の樹海をなぎ倒すように溢れた腸液が滴り、深い皺が何本も刻まれた辜丸が勃起した魔羅に自然と引っ張られて肛門に吸い込まれる。

年甲斐も無く淫乱な鎮外の下半身は影丸の柔らかく淫乱な下の口で難なく淫らな痴態を晒す。影丸が尻を左右に押し広げつつ内壁で搾る様に締め付けられ、刺激的で魅惑的な圧迫感に魔羅が温まり脈動が激しくなる。

「はあ……はう……はふあ……。も、もっと激しく刺激すれば……。お、起きるだろう……。鎮外殿、拙者の中に種汁注いで下され……っ!!」

「んおっ……おとおお……うぼっ!? はっはっはっはっはっ……」

痛い程に勃起して先走りを垂らす自身の魔羅を激しく扱く。鎮外にも良く見えるように腰を若干前に出しながら堂々と股を広げる。

そして、射精への欲求が下半身を支配し始めると。股を広げたまま両足で鎮外の豊満な胸を踏み扱指の間に乳首を挟んで器用に揉み解し、その柔らかさを改めて実感する。滲み出た汗が足の裏に移ると、それが潤滑油となり足の激しさは一層強くなる。

無論、その間も自慰行為は継続しており、既に先走りは裏筋や睪丸を抜けて山の様な腹にまで滴っている。

「んっ!? んぐっ!? んひいつ!! ひ……。あ……。やあ……。あっ!!? な、何が起こ……。ったあああっ!? あんっあんっあがああんっ!! 種付けして……。あ、熱い! 私! 魔羅が影丸殿の中にいい!!」

「はっ! はっ! はっ! はっ! お、おお! 鎮外殿っ! よ、漸く目覚めて、くれましたか! こ、ここは! 魔剣の! 迷宮……。んんんっ!! ら、らしいで……。すっ!! のおおおおっ! お、奥までしっかり届いて!! あ、ああ拙者の中が滅茶苦茶にさ……。んぎっ! んああっ!!」

「か、影丸殿お!? そ、そんな深くまで挿すと……。あっ! おおっ! おおおっ!! そ、そんな奥まで搾れて……。あ、あ、ぜ、ぜんた、いが、があっ! し、搾られ……。わ、わた、わたしいい逝くうううう!! 極楽に逝つてまおおおお!!」

「おっ! おんっ! ち、鎮外、殿お! 突き上げ! 腰の突き上げ凄っ!! 秘部まで嬲られ……。んっ!!」

床に爪を立てる程の強い快感に悶えながら大の字のまま腰を高く突き上げ、影丸に魔羅を挿入されたまま鎮外は射精をした。黒光りする魔羅は影丸の奥深くまで一直線に種汁を噴き出し、無骨に割れるまで鍛えられた腹筋を膨張させる。

肉同士が激しく衝突し合い泡立ち生臭い臭気を放つ腸液が噴き出す。聞いているだけで嘔吐しそうな嫌な水音が二人の接続部から響き渡る。

十二分に種付けされた影丸は恍惚の表情を浮かべながら腰を上下させ、鎮外の魔羅を更に締め付け犯す。腰を落とす際に種汁と腸液の混合粘液が真円状に飛び散り、鎮咳の顔面まで届いた。

雄の粘液で作られた白濁の海が床に広がり、その中心で影丸と鎮外は『目覚めの種付け』を鼻息荒く続けていた。

影丸は下半身から昇ってくる快感に悶えるように全身を震わせ、鎮咳は魔羅が吸収される快感に打ち震えつつ、歯を食い縛って腰を何度も何度も突き上げる。

まるで、迷宮に充満する瘴気に理性を奪われてしまったかのように。

そして、二人の体が離れた後も、魔羅の昂ぶりと肛門の疼きは暫く治まらなかった。

大狼の巨体を両腕で力強く揺すり、何とか起こそうとする。艶やかな銀毛の下の体は暖かく、腹部が静かに伸縮を繰り返している。気絶しているだけのようだ。

「大丈夫か。ほら起きるんだ。寝るにはまだ早いぞ」

「……………きゅううう……………うが？んぎやおおおおおおおおんっ！」

大きな目蓋が開かれると、横になったまま背筋を伸ばして大きく口を開く。眠たそうに欠伸をする。と軽やかな動きで立ち上がる。

頭を振って眠気を振り払うと、周囲の様子を伺う様に視線を向ける。そして、影丸の存在を確認すると尻尾を振って嬉しそうに顔を舐める。

「うおっ?! い、いきなり舐めるな! 顔が汚れてしまうだろ」

「がうがうがふう! ぐるるるるるる……………」

そうは言うものの、影丸は嬉しそうに笑顔を浮かべ柔らかい毛並みの頭を優しく撫でる。顎の下をくすぐれば気持ちよさそうに喉を鳴らす。

こうして見てみれば、大ききこそ異常ではあるが普通の狼……………犬の様な愛嬌があるようだ。怪物なのか動物なのかは分からないが、少なくとも影丸に対してはかなり懐いてくれたようだ。ふと、首元に顔を埋めて束の間の癒しを感じていると、影丸の頭にあることが浮かんた。

「そう言えば、お前の名前知らないな。……………お前、名前はあるのか？」

大狼はこちらの質問を理解したように暫く考え込む。そして、ゆっくりと顔を横に振った。

「無いのか。……………ならば拙者が名付けてやるう」

「わうっ?! わうっわうっがううう!!」

「お、おわっ! だからそんなに舐めるなど……………そうだな、お前も覚えやすい名前が良いだろう。

……………銀毛の狼だから、『銀太』なんてどうだ? 『銀』だけでは寂しいからな」

「わうっ!! わうっ!! がうがうがうがううううっ!!」

「お、気に入ってくれたか……………って、は、はははは! だから舐めるなど言っているのに」

大狼は『銀太』という名前を気に入ったようだ。感謝を伝えるかのように更に影丸の顔を舐め回す。影丸も応えるように全身を撫で回す。糸纏わぬ姿になっていたので毛皮の優しい温かみがじんわりと包み込んでくれる。

そうしてじゃれあっていると、大狼こと銀太が何かに気付いたように鼻をヒクヒクさせる。耳を立てさせて周囲の音を聞き分けて、『何か』を探しているようだ。

「お、おいどうした。……………敵か!」

「ぐるるるるる……………がうっ! あうっ! あううう……………」

「あ! おい待て! 勝手に動くのは危険だ! おいっ! 銀太!!」

迷の速魔羅

突然、影丸の体を振り払う様に銀太は駆け出した。狼らしいしなやかな動きで床を蹴り上げ廊下の向こうへ駆け出していく。影丸も必死で後を追うが、雄忍とは言え野生の狩人に勝てる程の脚力は持ち合わせていない。しかも、魔羅や寧丸が内腿に何度も叩き付かれるので気が散ってしまふ。

暫く廊下を走っていると、漸く銀太が立ち止まっているのが見えた。呼吸を乱しながら滲んだ汗を軽く拭い、様子を伺う。

見れば、口に何か石のようなものを咥えていて、それを甘噛みしたり前足で転がしたりして遊んでいるようだ。

恐らくこの石を見つけて駆け寄ったのだろう。影丸が追い付いたことに気付くと、銀太は口に咥えて影丸に見えるように掲げる。掌を向ければその上に石を落した。

「これを見つけたのか。……妖気の詰まった宝石……儀式用の供物か？こんな状況だ。何かの役には立つのかもしれない。ありがとうな、銀太」

「おおおおおんっ!!わうつぱうつわおおおん!!」

お礼にと影丸は銀太の頭を撫でて褒めてあげる。銀太は嬉しそうに尻尾を振ると、後ろ脚と尻だけで支えながら上手に立ち上がった。

前足を招き猫のように空回りさせながら、影丸以上の巨体で嬉しさを表現しているのだろう。その喜びように若干呆れながらも、影丸はその巨体に抱き付いて狼の毛皮の柔らかさと温かさを体感しながら続けた。

「……けどな、拙者とお前は相棒だ。お前が勝手に走り出して何かあったら拙者も困惑してしまう。だから、今度からはすぐに拙者に知らせてくれよ。なあ、銀太」

「あううううう………。……わんっわんっがうっ!!」

「よし、分かってくれれば大丈夫だ。そろそろ先へ進むぞ。いつまでも……だ、抱き合っている訳にもいかないからな」

「おおおおんっ!」

【宝玉】を入手しました。

・先へ進む…13

魔羅の迷宮

それは影丸が書物の調査を行い、その間銀太に怪しいものを探すように命令した後の事だった。次に調査しようと本棚の書物に手を掛けようとした瞬間だった。

「ぎやおおおっ!? ぐおおおがおおおお!! ぐがああああああ……あきゅっ!? きやいんきやいんぎゅううううう!!」

「!? 銀太どうした! 今行くぞ!!」

明らかに牙を剥き出しにした尋常ではない警戒の吠え声に、影丸が即座に反応する。未だに聞こえ続ける泣き声を頼りに書庫の中を駆け抜ける。勇ましかった吠え声は徐々に甲高く弱弱いものに変わり、窮地に陥っている可能性もある。あの大狼と相手の凶暴さも兼ね備える銀太を襲うとは、相当の手練れかもしれない。影丸の心臓が緊張に激しく脈動する。掌に汗が滲み床を蹴る足に力が入る。

「銀太! 大丈夫か!」

「きやうううんっ! きやうううんっ! が、がううううううっ!!」

本棚から雪崩の様に落下した大量の書物が銀太の体を埋めていた。だが、それだけではない。その下から抜け出した銀太が本棚を支えに後ろ足だけで立ち上がっているが。その下半身には表紙の開かれた書物が噛むように付着していた。

尻尾の下に隠れた肛門と鮮やかな桃色のまま勃起した魔羅。その二か所に重点的に書物が食い込んでおり、まるで二枚貝が貼り付いているようだ。

銀太は立ち上がり局部を本棚に擦りつけて引き剥がそうとしているが、中々上手く行かないようだ。悲鳴にも似た鳴き声を上げながら腰を震わせている。

「がううううぎやううううひやうううう……っ!! うおおおおおおおおん!!」

一際甲高い遠吠えを上げると、銀太の体が痺れたように小刻みに震えだす。見れば、魔羅を啜える書物の隙間から大量の種汁が溢れ出ているのが見える。貼り付いた書物が飲み干すようにそれを吸収し、更に求めるように挟み込んで射精を後押しする。肛門の書物も中身の一枚一枚が外れては筒状に丸まり、そのまま張り型のように太く硬く変形すると何本も同時に挿入された。強引に肛門を押し広げ意志を持ったように回転と震動を続け、銀太の脳内を快感の波に沈めようとする。

「……………っ!? ぎ、銀太大丈夫か!? 待ってろ、今すぐ助けてやる!!」

「きやうううう……きやうううう……くううううう……ん」

人間でありながら、深くにも大狼である銀太への凌辱に激しく興奮してしまった影丸だが、勃起して自慰行為を始めようとした瞬間、やっと正氣に戻った。

素早く銀太の近くに駆け寄り、邪魔な書物を迅速に押し退ける。そして銀太に貼り付いている書物を引き剥がそうとするが、想像以上に強い力で貼り付いているようで簡単には引き剥がせない。一

冊一冊全身の力を込めて引き剥がすが、その都度尻餅を着いてしまう。剥がした書物は背表紙から真つ二つに破り捨ててから放置し、すぐさま次の引き剥がしに取り掛かる。

先に魔羅の書物を全て引き剥がしたが、書物の中からは染み込んだ種汁が大量に溢れ出し、薄気味悪さすら感じてしまう。その過程で影丸の両手は愚か全身は斑上に種汁塗れになってしまい、沸き立つ獣の雄臭と熱気に魔羅は反応してしまう。

銀太に自身の自慰行為を見せ付けたい衝動に駆られるが、今は銀太を倒するのが先である。次は肛門に挿入した筒状の紙を必死に引き抜く。紙とは思えない程の硬さに変形しており、まるで芋でも引き抜く様に全力で力んでは、何度も尻餅を繰り返す。

そして、尻餅を着きすぎて尻が真つ赤に腫れてしまった頃、やっと全ての書物を銀太から引き剥がすことに成功した。

「はあ……はあ……はあ……ま、まさかこんな罠があるとは……。銀太、怪我は無いかな？」

「くううう……くう、わうわうわんっ。わふううう……」

「……怪我はないが……激しく犯されて疲れたのか。済まない、拙者も盲点だった。まさか書物が怪物化しているとは……。この迷宮では何でも注意して取り掛からないといけないな」

「わんっわんっ！」

「お前は少しここで休んでいろ。書物は全部破ったからもう大丈夫だ。拙者は……す、少し所用を済ませてくる」

若干言葉を濁らせながら、影丸の自身の破裂寸前の魔羅を見た。少しでも扱けば濃厚な種汁が溢れ出てくるだろう。……つまりはそういう所用である。

知ってか知らずか、銀太は若干元氣を取り戻した鳴き声で、本棚の陰に消えた背中に向かって返事をした。

・所用を済ませて先へ進む…64

迷宮の魔羅黒

先へ進むと明らかに怪しい場所に辿り着いた。それまで通ってきた廊下と同じように一直線に進んでいるが、その途中には一枚の扉が見える。通常ならば警戒はするものの問題なく進むだろう。しかし、床には一面真っ赤に染まっており、一見毛皮にも粘液にも、はたまた石材にも見える、これまで見たことの無いものが広がっていた。

無論、露骨なほどに強い妖気が床から放たれており、時折床が揺らめいているように感じる。様子を探るために軽く指先で突くが、柔らかく生暖かいが部分的に硬いものが混ざっているようだ。粘り気も強く、納豆の様に糸を引いている。

進むのを止めて戻るのも手だが、目前に扉があるのと赤い床はさほど長くは続いているということもあって、そうする気にもならない。

寧ろ、この迷宮の中では妖しく危険な場所にこそ重要なものがある可能性が高い。

「……よし、悩んでも仕方ないな。進むぞ」

自分にも言い聞かせるように声を荒げると、相棒に後に続くよう促し先に足を踏み込む。

素足の裏に何とも言えない感触が広がり、思わず出した足を引きたくなってしまふ。まるで床自体が生きて蠢いているような錯覚にも陥る。

だが自分が弱音を吐いては相棒に不安が伝わってしまう。歯を食い縛って我慢をしながら足早に廊下を駆け抜けていく。最初は不快感しかなかった床も徐々に慣れていき、足取りも軽やかになり心に余裕も出てきた。

一度振り返ると、相棒も不安そうに通路を歩いていた。足取りはぎこちないが、影丸の歩いた後を健気に続いている。

影丸もその様子を見て安心すると、相棒の歩く速度に合わせてるように前に進む。もうそろそろ扉に到着する頃には、足裏の感触に何の嫌悪感もなくなってしまった。困難な状況下で何度も窮地に陥った雄忍だからこそその適応能力なのだろうか。

そうして特に問題なく影丸は扉の前まで辿り着いた。そして、扉を詳しく調べようとした時だった。相棒がまだ歩いている方角から、驚きと恐怖に満ちた叫び声が鼓膜を引き裂くような大ききで聞こえた。声の主も間違いない相棒のもので、何かに襲われた可能性が高い。

同時に悲鳴の方向からはただならぬ妖気が生まれているのが分かり、それが影丸の足元にまで広がっているのが肌で感じられた。

明らかに危険な何かが発生している。影丸は急いで相棒の方へ振り返った。

・相棒が鎮外…71

・相棒が銀太…72

迷宮の魔黒

凄まじい程の妖気と瘴気を放ちながら強く発光する方陣は、その圧倒的な力で更に影丸を追い詰めていく。魔羅と肛門から止め処なく体液やら排泄物やらが洪水の様に溢れ出し、口からは涎と胃液が滝の様に溢れる。

まるで体内にある水分が全て方陣に吸い込まれるようだ。

「ぐ……ぐひいつ?! ひあうあんういぎゅおおおお……! ぎ、ぎん、た! に、逃げ……」

吐き出すことによる圧倒的解放感と脱力感に意識を蝕まれながら、視線の端で震える銀毛の塊に伝わる。このまま全滅するよりも、せめて銀太だけは……人間ではないにしろ自分が愛でる存在だけでも逃がさなければ……。そんな強い意識が頭をかすめる。

「ぐるるるるるる……グルルルルル……ヒュウウヒュウウヒュウウヒョオオオ……」

だが、銀太の様子は明らかにおかしかった。影丸の様に失禁や嘔吐をするでもなく、普通の状態のままでもなく、何故かどこか凛々しい姿をしていた。

影丸の声は間違いなく聞こえているだろう。声に合わせて耳を動かしてはいるが、決して逃げようとはしない。寧ろ方陣の中心に向けて早足で駆け出した。

影丸が制止しても構わず走り、方陣の中央に辿り着くと四肢を踏ん張る様に爪を立てて全身の毛を逆立てる。

するとどうだろう。美しい銀色だった毛皮が徐々に淡い光を放ち始め、雪の様な純白の毛皮へと変化したのだった。

そして長い尻尾を掲げるように真上に伸ばして身を低くする。そこから勢いよく前半身を突き出すように天を仰ぐと、一際大きく長い咆哮を上げた。まるで管楽器のような、重厚で良く響く荘厳な咆哮であった。

「アオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ………ン」

その一吠えが響き渡った瞬間、方陣が一際強い光を放った。だが、それに加え方陣が刻まれた床に複数のヒビが走り始めた。それは徐々に大きな音と共に全体に広がっていき、最終的には爆発したような強い衝撃波と共に砕け散ってしまった。

衝撃波は銀太を中心にして真円状に発生し、影丸も吹き飛ばされて壁に叩き付けられてしまう。飛んでくる破片を微かな意識で防ぎながらも、徐々に体中に精気が戻ってくるのを感じていた。

衝撃波が収まり、方陣が完全に破壊されると、銀太が足早に影丸の元へと駆け寄ってきた。体毛は既にいつもの銀色に戻っており、どこか神々しかった雰囲気も無くなっている。

壁に背中を預けて腰を下ろす影丸に、銀太は心配そうに見つめ顔を舐める。そんな不安を吹き飛ばすように笑顔で頭を撫でてやり、首元に抱き付いた。

「……全く。お前は想像以上の狼だな。……ありがとう、銀太」

その言葉を聞いて、銀太は一転嬉しそうに尻尾を振って頬を擦り付けてきた。単なる巨大な狼か狼に似た怪物だと思っていた影丸。だが、今の光景を見てそのどちらもあり得ないだろうなど、本能的に感じた。

「魔を祓う力……聖獣……神の使い……ふっ、まさかな」

どの道、銀太への思いは変わらない。どんな存在であろうと、自分に甘えてくれて自分を信頼してくれる、そして自分と共に道を歩んでくれる可愛い狼……可愛い相棒なのだ。安心させるように大きな背中をゆっくりと撫でながら時間を過ごし、体力を回復させる。銀太の調子も元通りになると、すぐさま探索を再開した。

「……ん？あれは……」

歩き出そうとした影丸の視界に、何か不思議なものが映る。先程銀太が咆哮を上げた場所、方陣の中心だった場所に何かが落ちている。

近付いてよく見ると、それは美しい光沢を放つ勾玉であった。勾玉と言っても結構な大きさがあり、影丸の掌と同じ程度の大きさはあるだろう。術具の筈だが妖気は一切感じられず、単なる石の飾りと化しているようだ。

「方陣の力の源か？どの道、ここに残すのは得策ではないな。持っていくか」

改めて部屋の奥を見ると、二つの出口が見えた。

一つは下り階段。もう一つは更に奥に続く通路。

どちらからも微かな妖気は感じられるが、この迷宮内では妖気を感じられない場所は皆無に等しいだろう。

【勾玉】を入手した。

・階段を降り…4

・やうに奥へ進む…57

迷宮の羅魔黒

扉を開けて部屋に入ると、そこは何の変哲もない小部屋のようだった。だが、まるで倉庫の様な様々なものが乱雑に置かれており、奥に進むだけでも足を取られて一苦勞である。

だが埃が一切ない事と、置かれているもの全てが雄専用の攻め道具であることは異様であった。攻め道具に関してはいずれも使われた直後の様に白濁の粘液が絡み付いており、鼻腔に染み込みそうなほどの雄臭さと熱気が部屋中に充満している。

確認する度に思わずこれを使っていた時の妄想をしてしまい、影丸の魔羅は触れずとも勃起してしまった。そして無意識の内に数度扱いてしまえばあっさり射精してしまった。

「くっ……あっあっあっあっあっあっあっあっあっあっあ……」

やはり埃の積もっていない床にぶちまけられた種汁は一層強い雄臭さと熱気を沸き立たせ、射精した本人である影丸にも媚薬の様に更なる興奮をもたらす。

だが、ここは黒魔羅の迷宮の中である。このまま自慰行為を続けていけば必ず迷宮に取り込まれてしまうだろう。自慰行為をするにしても、ここするのは危険行為である。

雄忍としての任務を思い出して先に進むと、一際強い妖気を放つ物を発見できた。

片手で容易に持てる程の大きさと重さで、表面と内部には細かい術式のようなものが延々刻まれているようだ。

「壺、か？封がされていないのなら、この壺そのものが妖気の発生源なのだろうが。……最早悩む必要はないな。使えるものは何でも使わんと」

【壺】を入手しました。

・先へ進む…33



種汁で汚しながらも恍惚の表情で飲み干し続けている。

本人の魔羅も血管が浮き上がる程勃起しており、鈴口の締りを失ったかのように種汁をダラダラ垂れ流しにしている。最早、影丸同様に磔の雄たちの種汁無しでは生きていけないだろう。

「あ……じゆるじゆるじゆる……うへあ……！しゅ、しゅこい甘さだ……！！も、もつと……もつと拙者にのませて……下されえ……。もつと種汁ほしい……種汁のましえてくれえ……。！！のまにやいと、あたまがおきやしくにやりしようじゃああああ……。！！」

徐々に影丸の口調も呂律が回らなくなる。頭巾ごと顔面に種汁を受けながら、種汁を垂れ流して大喜びする。何度も何度も魔羅の間を往復し、腹筋が丸丸と膨張するほど咥え続けた。

そして、遂に腹が一杯になると同時に目の前の視界が狭まり、種汁を垂れ流しながら倒れてしまい、意識を失ったのだった……。

喘ぎよがる雄たちを伸縮している壁の一部が、倒れた影丸と相棒の体に、まるで食指でも伸ばすように伸びる。音も無く近づき、影丸たちを新たな磔の雄として迎え入れようとする。もう暫くすれば影丸たちも終わらぬ快感と歯痒さの狭間で乱れ続けるのだろう。

文字通り、この迷宮の一部と化しながら……

ゲームオーバー

・最初に戻る……」

魔羅の迷宮

体力の回復もかねてゆっくりと進んで行くと、比較的広い場所に辿り着いた。天井も高く一見居心地が良さそうだが、立ち込める瘴気がそれを台無しにしている。

更に周囲を観察すると、ここは部屋と言う訳では無く、通路の分岐点に当たる場所のようだ影丸たちが入ってきた入り口とは別に、三方向へ続く出口が確認できる。

右の道からは強い妖気が感じられ、何かしらの存在があるのは確実だろう。

中央の道からは明らかに強い妖気が感じ取れると同時に、何かが蠢くような音も聞こえる。危険相田が、それを乗り越えれば大きな収穫があるかもしれない。

左の道からは微かな妖気を感じるが、迷宮に立ち込める瘴気とは誤差の範囲程度しか感じ取れず、何もない可能性もある。

「むう、どの道を通れば良いのか……あまり悩みたくはないが……悩むな」

・ 右の道く進む…49

・ 中央の道く進む…53

・ 左の道く進む…34

迷宮の羅魔鬼黒

部屋には入らず苦心して先に進むと、赤い床は無くなり問題なく進めるようになった。しかし、先ほど蹴られたことで影丸たちの体力が失われているのと同時に、抑えきれない性欲が全身を蝕んでいた。

気を抜けば横を歩く相棒を押し倒して、そのまま力づくで犯してしまいそうになる。正直、そんなれば相棒も喜んで受け入れるだろうが、それによる時間と体力の消耗は痛い。

「む、むおお……ど、どこか休める場所で一発抜きたいが……。良さそうな場所は無いのか……」

隠そうともせず自然と呟いてしまうほどに、影丸は抑圧されていた。勃起する魔羅は風を切る様に堂々と揺れ動き、汗を流すように自然と種汁を垂れ流してしまふ。

そうして暫く歩いていると、若干幅が狭い通路に辿り着いた。両脇の壁が不自然に凸凹しており、色も肌色が混ざった斑な色に彩色されている。

……いや、凸凹している訳でも、彩色されている訳でもなかった。

その通路の『正体』を知った途端、影丸たちは目を大きく開いて驚き、その場から動けなくなった。

「あ……あひっ！たねひるおもらひひひやうじえええ！おりえしやまのひんぽが……うじゅいてうじゅいてばくひやくしゅるへええええ……」

「ふひっ、ふひひひひひひひへへへへへへへ……。おみやんこじゅうううつとぐりゅぐりゅほりやれてりゅうううう。もうぎやばぎやばしゅぎてしまりやなあいいい……」

「はひっちうひっおひっむひっぐひっわひっえひっむひっずひっおひっぬひっこひっほひよおおおおおお！！ぎんもじいいいいっ！まりやもこうもんもぎんもじいいよおおおおおっ！！」

両脇の壁には、数え切れない程の雄共が磔にされていた。いや、磔と言うよりも壁に吸収されているという表現が正確だろう。様々な格好で壁から体の一部を出しては、快感に堕ちた狂った笑顔を浮かべていた。

ある者は顔と魔羅と肛門だけを壁から突き出され、緩んだ穴を疼かせて種汁と腸液を漏らす。またある者は顔半分と魔羅と片腕だけ突き出し、勃起した魔羅を只管扱いては射精していた。またある者は別の者から魔羅を肛門に挿入された状態で壁にめり込み、接続部は壁の中で見えない。ただ、背後の雄の顔が鼻息荒くなると、上半身を大きく痙攣させて歓喜の喘ぎを上げる。

「こいつらは……迷宮の取り込まれた者たちのなれの果てか。拙者たちはこうならぬように……」

そう呟きながら足早にこの場所を抜けようすると、魔羅と顔を壁から突き出した髭面の雄が懇願するように影丸に向かって叫ぶ。その真下辺りには、異様に太い血管を浮き出して勃起し、大量の先走りを釣り糸の様に垂らす魔羅が壁から生えていた。

「た、たしゅけえ……！おりえのまりや、魔羅をしやふっへくりえええ。がまん、むりいいい」

・魔羅を咥えてやろ…56

・咥えずいの場を去ろ…70

運

意を決してその長い階段を上ると、大きな空間に辿り付いた。兎に角広大な場所で、何故か瘴氣の霧は立ち込めていないが、他の場所以上に強い妖氣が場に満ちていた。

思わず影丸たちの体が震えてしまい、魔羅が萎えてしまうほどの緊張感が部屋中に満ちていた。

「くっ……なんなんだこの場所は……。黒魔羅の迷宮とは言え、力場とでも言うのか。このような凄まじい場所が存在しているとは……。……っう、まるで全身に針が刺さるようだ」

歯を食い縛り警戒をしながら部屋の中に足を進めると、更に強い妖氣が全身を襲う。緊張感に代わり恐怖とでも言うような感覚が全身を駆け巡り、思わず体が震えてしまう。

だが、それ以上に警戒すべきことが視界に入る。この広大な空間全体を使う様に、巨大な方陣が床に刻まれているのだ。

影丸は全く見たことの無い方陣であるが、凄まじい程に細かく細部まで刻み込まれており、まるで芸術品の様な美しさもある。だが、反面その常軌を逸した細かさに体が竦んでしまい背筋が寒くなってしまう。

「こ、この方陣は……。これが妖氣の発信源か……。こ、これさえ破壊できればこの妖氣も……。試してみる価値はありそうだな」

一瞬余りの存在感到躊躇してしまうが、影丸は意を決して方陣の破壊に取り掛かろうとする。この手の細かい方陣の場合、少しでも形を崩せば力は失われるはずである。

影丸は近くに転がっていた適当な石を取り、方陣の一部を削ろうと試みる。しかし、方陣は床の非常に深くまで直接刻み込まれており、そう簡単には破壊できない。

だが逃げる訳にはいかない。相棒にも方陣の破壊を手伝う様に伝えようと、影丸は一心不乱に石で床を削ろうとする。

だが、次の瞬間だった。

方陣が凄まじい光を放ったと思うと、それまでとは異なる熱い焼けるような力を放ちながら影丸たちの体を包み込んでいく。

・鎮外が相棒である…60

・銀太が相棒である…64

・どちらも相棒では無…63

運

「ぐうっ!? な、何……っああ!? あああああ! も、漏れ……!!!」

言い終わる前に、既に影丸は小便を滝の如く漏らしていた。黄色く濁った液体が鈴口から勢い良く溢れ出し、影丸自身の意思とは無関係に勢いを増していく。慌てて魔羅に力を入れようとするが、何故か全く力が入らない。まるで鈴口や尿道の筋肉が固まってしまったかのように、文字通り小便を垂れ流し続ける。

それは肛門も同じだった。種付け時以上に大きく口を開けたまま内壁が自由に動かせなくなり、少し動くだけでも惜しげも無く腸液や大便が漏れ出てしまう。あまりの恥ずかしさと異様さに空間から脱出しようとするが、体全体を押し付けるような見えない力に阻まれて、自由に体を動かせない。

「や、止め……止めろおお! こ、こんな……拙者の体では無いぞっ! は、排泄が止まらない、こんな汚れた体は……拙者のでは無いいいいっ!!!」

四つん這いになって顔を埋めて恥ずかしがる影丸だが、その間にも小便の黄色い水溜りは拡がり、大便が積み重なったとぐろは高さを増していく。強烈に深いな汚物臭が視線の効かない光の中でも鼻腔に届き、影丸の羞恥と、微かな興奮を目覚めさせていく。

だが、良く見れば小便も大便も少しずつ方陣に吸収されていた。まるで床に染み込んでいくかのようになくなっていき、吸収すればするほど法の人放つ光は強くなっていく。

「ぬ、ぬううう……こ、この方陣は……もし本当ならば、やるしか無いっ」

影丸と同じように、鎮外も押し寄せる排泄感に全身を蝕まれていた。何とか壁に寄りかかり立った姿勢を保っているが、小便と大便は我慢も出来ずに惜しげも無く漏らし続けており、そのまま方陣に吸収されていく。

いつか読んだ方陣の教書に書かれていた「精気吸収の封印」。それと酷似した方陣ならば、特定の呪文を唱え切れば効果が失われるはずである。

だが、呪文は覚えてはいるものの教書自体がかなり古いものだったので、事実なのかが分からない。そもそも教書の記憶も鎮外の思い違いという可能性もある。

「ん……んはおっ!? じゃ、じゃが……このままでは影丸殿までも……。やるしか……無い!」

既に、鈴口からは小便の代わりに濃厚な種汁が溢れ出していた。まるで管でも挿入されて吸われるような感覚に、思わず興奮して気持ち良くなってしまう。影丸も同様のようで、我慢できずに魔羅を驚掴みして激しく抜き上げている。あのまま放置すればすぐに種汁が枯渇してしまい、方陣の餌食になってしまうだろう。

鎮外は下半身の快感に耐えつつおもむろに目蓋を閉じる。そして、僧侶として培った集中力を最大限まで高めて高速で呪文詠唱を開始する。自国でも大陸でもない言語の並びを、正確かつ大声で唱え続ける。唱え続ける度に方陣の光が点滅し床に小さなひび割れが広がっていくが、一々気にせず詠唱だけに集中する。

魔羅の迷宮

「~~~~~」

一際強い勢いで種汁を噴出した瞬間、目蓋を開いて両手を合わせて印を切る。詠唱が完了したのだ。その瞬間、空間全体が自身の様に揺れ始め床に多くのヒビが走る。ヒビはいとも簡単に方陣を破壊していき、その形も崩れていく。

強い光は徐々に収束していき、揺れも治まってきたところに方陣の中心部であった場所に収束して、一つの勾玉に変化した。

「勾玉……？何故このような場所で……。いったい何を封印していたのだ？教書通りならば、破壊によって何かしらが封印から解かれるはずなのだが……これ、なのか？」

鎮外の予想に反して、勾玉からは何の妖気も感じられない。光沢が美しく装飾品としては重宝されそうだが、術具としては価値のある物とは思えない。置いて行く選択肢はない。だが、命を懸けて混ぜ入手した代物である。置いて行く選択肢はない。

「……！そうだ！！影丸殿！影丸殿お！！御無事でしょうか！？方陣は破壊した故、もう大丈夫です」
床に倒れ込んだ影丸に急いで駆け寄る。極度に疲労している気絶しているようだが、呼吸もしっかりしており脈も強い。命には問題なさそうだ。

一安心して胸を撫で下ろすと、鎮外も影丸に寄り添う様に横たわる。

「こうしていれば、寒くはないですよ。影丸殿、安心しておやすみなさい」

先を見れば二方向に道が分かれているが、それは後々影丸が起きてからでも良いだろう。影丸の筋肉質な体を優しく抱擁しながら、鎮外も一時の休息に入った。

- ・階段が見える通路へ進む…4
- ・直進してくる通路へ進む…57

迷宮の羅魔黒

「ふむ、これは……」

鎮外が近くの本棚に歩み寄り適当な書物を手に取ると、興味深そうに領きながら黙読し始める。読む速度はかなり速く、影丸が横から話しかけようと追いかけた時には既に厚い書物の半分を読み終えていた。

「何か有益な情報があったのか？」

「あ、いえいえ、この迷宮に直接関するものは今の所。ですがかなり貴重な書物ばかり收藏されているようですな。過去の所有者と共に当時の書物も取り込んでいたようですな。いやはや、ここが迷宮の中でなければ一晩中読み耽りたい所ですが……」

「だが、それだけ古くからの物があれば、もしかしたら魔剣の迷宮に関する情報もあるかもしれない。探す必要があるかもしれないな」

「ですね。全ては読み切れませんが、それらしいものを重点的に調べれば……何とかなるかもしれません」

影丸と鎮外は二手に分かれて気になる書物の調査を開始した。黒魔羅に関するもの、魔剣に関するもの、大魔羅城に関するもの、雄の淫術に関するもの……。兎に角ここから脱出するのに必要な情報を集める為一心不乱に読み続けた。

……最早時間の感覚が無くなりかける程に書物に目を走らせると、気になる一文を鎮外が見つけた。

「む、これは……『魔剣に封じられた妖が異次元の迷宮を作り上げる事あり。迷宮を破壊するには力の源の妖を倒す、または魔剣より解放すべし。』か。つまりはこの『魔剣の妖』を探し出し討伐、もしくは解放すれば……！影丸殿!!影丸殿!!これを読んで下され!影丸ど……」

やつと発見した情報を知らせようと、若干興奮気味に影丸を探す。流石に本棚が立ち並び視界が狭い中で探すのは難しい。名前を呼びながら歩き回る。

すると、どこからは鎮外の名前を呼ぶ声が聞こえてくる。声の主は聞き覚えがあった。無論影丸の勇ましい声であった。

返事をしながら互いに近づいて行く。徐々に声が近くなり、どこからは走るような足音も聞こえてくる。

「影丸殿!ここにおります!私はここに……おおっ!」

「鎮外ど……うおっ!」

本棚の物陰から同時に飛び出した二人は勢い良くぶつかってしまった、そのまま倒れてしまった。鎮外の方が早足だったのか、影丸を押し倒すような形になってしまった。

……全身の痛みに耐えながら相手を見やると、予想以上に目の前に顔がある。思わず視線が重なり互いに頬が紅潮してしまう。剥き出しの魔羅が触れ合った状態で脈打ってしまうので、徐々に勃起し始めてしまい、体を動かせば先走りに濡れて思わず熱い吐息を漏らしてしまう。

腰の動きはどちらからともなく激しくなり、固くなつた裏筋を抜き合うように刺激する。溢れる先走りは量を増やし、脇腹や股を伝つて冷たい床に流れ出る。

「……………か、影丸殿……………あ、後でお知らせするので……………わ、私と……………私と接吻を……………」

「き、奇遇だな、鎮外殿。せ、拙者も……………鎮外殿の唇が……………んっ、んぶふう……………!」

「おぶっ!おほおお……………くあ、ぐあふえはふひよによおお……………」

影丸自身が口元の布をずらし、無精髭が生える口元を晒す。そのまま鎮外の頭を強引に引きつける様にして唇を重ねた。

即座に互いの舌を挿入し合い、歯の内側を舐め取る様に暴れさせる。舌同士を絡ませ合い、大量の涎を相手の口内に注ぎ込む。顔の角度を変えて何度も貪るように舌を奪い合えば、それだけで魔羅は種汁を発射させた。

時折互いの表情を確認するように唇を離す時も、舌を突き出し合い涎の糸で結び合う。舌先を蛇の様に小刻みに動かし突き合えば、何とも言えない背徳感と満足感に満たされる。溢れる種汁の量も増えていき、二人の陰毛や辜丸、それどころか下半身全体を白濁に汚す。

溢れる雄臭さ、湿った熱気が周囲の書物にも染み込む。一見整然と整理された書庫を自分たちの体液で汚す事にまで快感を見つけてしまう。

「んぶっおふっじゅぶぶぶぶぶぶ……………はあはあはあ……………ちんがい……………どのお……………」

「かげまる!かげまるどによお!!んっじゅるじゅるじゅる……………んんんんんんっ!」

……………だが、想像以上に興奮し乱れてしまったので、正氣に戻った後の気恥ずかしさは一際強くなったのだった。

白濁に汚れた下半身を洗い流す事も出来ず、顔を真っ赤にしながらも調査の結果を報告する。

「わ、私は迷宮を破壊する方法を見つけた故……………そ、その……………報告をさせてもらった……………。ん!うおっほん!!か、影丸殿は如何なされた」

「!!し、失礼いたす!拙者は妖気を帯びた宝玉を発見したので、その旨を報告しに参った」

確かに影丸の手には妖気が放たれた宝玉が握られていた。かなり強い妖気のように、何かしらの役に立つのは間違いないだろう。

「で、では……………先を急ぐぞ!鎮外殿!」

「う、うむ!それが良いな……………その……………影丸殿の舌捌きは、接吻でも素晴らしかったですぞ」

「!?そ、そそ、それは……………それは、それは、有り難い事だな……………せ、拙者も、気持ち良かったぞ、鎮外殿……………」

何だかんだ互いに満足した表情を浮かべながら、書庫を抜ける二人であった。

【宝玉】を入手しました。

影丸は先程入手した巨大な張り型を思い出した。もし、本物の魔羅でなくても良いのなら、この張り型が鍵の代わりにならないだろうか。

「……試す価値はあるな。早速挿しこんでみるか」

尿道に刺さる棒の位置と鈴口の位置を確認しながら、慎重に張り型を壁の穴に挿入していく。目測だと太さは問題ないようで、長さも十分奥まで足りそうだ。すると、目測通り張り型は穴の中に丁度嵌まるように挿入された。攻め道具としてよりも、鍵としての役割で作られたものだったのだろう。

巨大な扉が不快な音を響かせながら開かれる。厚い扉が少しずつ開いていくと同時に中から大量の瘴気が溢れ出す。間違いなく瘴気の発生源はこの中にある。それを絶てば迷宮からの脱出もかなえられるだろう。

「よし、行くぞ!!」

相棒も力強く頷く。そして、覚悟を決めて歯を食い縛ると、瘴気溢れる空間の中に強く足を踏み出した。

・瘴気の最深部へ…44

迷宮の魔羅黒

方陣を描く溝に沿って光が走る。光は瞬く間に空間の全てを包み込み影丸たちの視界を奪い去る。今まで感じたことの無い強力な妖気が全身に絡み付き、そのまま押し倒すように重みを増す。為す術無く方陣に倒れ込むように膝を着く。

これは不味い。早くここから逃げ出さなければ。そう考えて体を動かそうにも強烈な圧迫感に耐えるのがやっとで、動かす事すら出来ない。

「ぐ……ぐおおおお……!!ぬん……んおお……ぬがああああ………っ!!」

苦し紛れに声を張り上げて必死に全身の筋肉を硬くし膨張させるが、指一本動かすだけでも汗が滲み出てしまう。疲労がとてつもない速さで蓄積し始め、妖気为天蓋に押し潰されてしまう。

しかし、その前に下半身に異様な感触が走った。急に魔羅と肛門から圧迫感を感じなくなった。天の助けか？一瞬はそう思った。

だが違う。圧迫感どころか普段から締めている鈴口や尿道、内壁や肛門までも一切力が入らなくなった。

圧死を耐えるために腹筋や太腿に力を入れ続けていた結果、凄まじい勢いで小便と大便を漏らしてしまう。大きな水音と何かが破裂するような音、そして排泄物特有の凄まじい生臭さが熱気と共に漂ってきた。

「むおおおおおっ!!な、何だ！これ、はあ……あふっ！あ、がはあっ！あああああああああああああああああああ!!止める……止まれ……っ！拙者の中が……拙者、の、汚物が……垂れ流しに……い、嫌だあ……いやだあああああ。とまらぬうもれるのとまらぬうう」

影丸は涙目になりながらも必死に下半身に力を入れようとする。しかし、魔羅と肛門には一切力が入らず、ただ只管に漏らし続けてしまう。小便の黄色い溜まりと大便の山が汚らしい光景となって影丸の視界に入ってしまう、自身の情けなすぎる姿に絶望してしまう。

だが同時に、興奮もしてしまっていた。離れた場所には同じように倒れながら小便と大便を垂れ流す相棒の姿、互いにそれを見合えばなぜか魔羅は勃起してしまう。

激しい小便の勢いで尿道は削られるように刺激され、とうとう小便に混ざって勢い良く射精してしまう。自分の意思とは全く違う射精の感覚に戸惑いながらも、未知の快感に表情は苦悶から恍惚へと変化していく。

口から涎を垂れ流しながら快感に打ち震える二人には、最早体を支えることすら困難だった。徐々に四肢は力を失い方陣に礫にされるように俯せになる。四肢を時折痙攣させているが、あくまで快感による痙攣なので、力は入らなかった。何故か溢れる種汁や小便、大便らが全て方陣の中に吸収されているのも視界の端で何となくわかったが、彼らにとっては最早どうでも良い事であった。

魔羅の迷宮

「あ……あひいつ、あひつぐひつふひやああつあ……。せ、つしや、ぎもんじいいい！も、このままだなつても……いいや……」

そうして快感と引き換えに意識を手放した二人は、恍惚の笑顔のままその場に倒れ込んだ。意識が無くなつても排泄は継続し、それぞれの逞しい体を汚していった。

するとそれを察知したかのように光がさらに強くなる。二人の体を包み込むように光の波が打ち寄せると、瞬く間にその中に巻き込まれてしまう。そして、光が収まるのと同時に方陣の中へ排泄物ごと吸収されていった。

光が収まった後、そこには何も存在していなかった。誰も存在していなかった。

ただ、巨大な方陣が次に来るであろう獲物を狙うために、妖しい存在感を放つだけであった。

ゲームオーバー

・最初に戻る……」

迷宮の四魔黒

書庫を抜けて先に進むと、曲がり角に出会った。分岐の無いただの曲り道であるが、門には扉が一枚設置されていた。

どちらか一方に進まなければいけないだろうが、それよりも目についてのは、通路の脇に飾る様に掛けられていた大きな棒であった。

「な、何という巨大な……。意匠もまるで本物のようだ。ま、まさか触ったら脈や熱まであることは……」

恐る恐る影丸はそれに触れる。手触りは本物同様若干の柔らかさと適度な硬さを備えたもので、流石に熱や脈動は感じられない。

だが、とにかく大きい。影丸や相棒、それどころか影丸がこれまで相手をしてきた雄の誰よりも雄々しく位に太く長い。浮き出た血管や艶やかに輝く亀頭、口を開いた鈴口やそこから覗く尿道の内壁、そして全体による緻の精密さには驚くばかりである。

「素晴らしい張り型だな。まるで刀のようだな。……ここに残しておくには惜しい逸品だな。武器にもなるし……せ、拙者たちで楽しむこともできるかも、しれぬ。……うむ！ 決めた！ 持つていくぞ！」

自分を納得させるように大声を出す影丸だが、相棒も同意するように頷いた。その顔は若干紅潮しているようにも見えた。

【大きな張り型】を入手した。

- ・曲がり角の先へ進む…63
- ・部屋に入る…65

迷宮の羅魔鬼黒

「……!? な……んこは一体……」

そこは魔人の間でも、黒魔羅が置かれていた小部屋でもなかった。それどころか相棒の姿も見えず影丸一人しか立っていないかった。辺りを見渡しても、あるのはどこまでも続く暗闇。右も左も上も下も前も後ろも分らない。方向感覚が麻痺してしまいそうになる。

だが、その暗闇の中で一つ、微かに輝く物体があった。仄かな温かみを放ちながら影丸の目の前に浮かんでいるそれは、身に覚えのあるものだった。

「……勾玉?」

迷宮内で入手した勾玉は、影丸を誘う様にゆらゆらと浮かび続けていると、徐々にその場から離れていく。自然と影丸も勾玉を追って暗闇の中を進む。相変わらず闇が続くだけの謎の空間だが、何故か勾玉の光を見つめていると安心できる。そんな気がした。

暫く歩いていると、勾玉が速度を上げ始める。まるで出口を見つけたように徐々に速度を上げていき、影丸から離れてしまいそうになる。

だが影丸も必死である。見失っては不味いと全力で走り始め勾玉が行く先へついて行く。

そして、勾玉は不意に動きを止めると、そのまま浮かぶのを止めて眠るように倒れていた『それ』の胸元に落ちた。

『それ』は紫の肌と額から生える角を持ち、鋭い牙と爪、そして眼光を備えている。影丸とは比較にならない巨大な魔羅と皋丸を股間に生やし、逞しい筋肉で全身を包んだ雄であった。

「魔人!? 封印石に封じられたのでは……」

外見はどう見ても先程戦った魔人であったが、一点だけ違う点がある。あれ程強く感じた妖気がほとんど感じられない。まるで普通の呪術師や妖怪程度の妖気しか放っておらず、確実に力が失われている。

「……まさか、封印石に封じ込められたのは、魔人の『妖気』だけだと言うのか? ならば、今ここに倒れている『魔人』は、もう既に『魔人』という存在では……」

影丸の推論を遮るように、勾玉が突然輝き出す。そこから放たれた光の帯が魔人の全身を包み込み、目の高さまで浮かび上がる。光の帯は更に闇の空間全域に向かって伸び始め、無限の闇を一気に引き裂いて行く。

するとどうだろう。魔人の体そのものが帯の中で輝き始めると、その光が一気に影丸を包み込んだ。急いで両目を腕で隠すと、猛烈な風が周囲から巻き起こると同時に、何かが崩れる轟音が四方から聞こえてくる。それは影丸と魔人のいる位置に近づいていき、遂には足元にまでヒビが入るのが分かった。

そして、足元が崩れ落ちる瞬間、わずかな視界の中で影丸は見た。魔人の体が光の帯の中で角が、牙が消滅するように消え、肌の色が薄くなっていくのを。

そして影丸は直感していた。この空間の正体と勾玉の正体、そして、この空間が崩壊し魔人の姿が変貌していく意味を。

「……魔人も、黒魔羅から解放された……。瘴気を振り払い、元の力を取り戻して……」

そして、足元が崩れて落下していく感覚の中、もう一度意識を失った。

・【鎮外】が相棒である…:68

・【銀太】が相棒である…:67



「……………ん……ん、ぐう……。……つう……。……こは……」

「おお、目覚めましたか、影丸殿」

「!? 鎮外殿……………つと、この場所は……まさか」

意識を取り戻した影丸は状態を起こして周囲を窺う。鎮外が冷静な態度で胡坐をかいているが、その通りに周囲は物静かな雰囲気にも包まれている。以前通過した記憶がある隠し通路、四方が木製の壁で囲まれた小部屋。空気は冷たく、激しい戦いで火照った体を冷やす。

背後に振り替えれば、そこには迷宮の大元とも言える存在の魔剣『黒魔羅』がああ時のまま鎮座していた。

緊張した面持ちで立ち上がると、影丸はゆづくりと黒魔羅に近づき様子を伺う。微かな妖気を放つ魔剣はあの時同様、影丸たちが迷宮に取り込まれたとき同様に飾られていた。白銀の刀身と漆黒の柄の対比が、正に黒光りする魔羅と溢れ出す種汁である。

「……………よしっ」

一度大きく深呼吸をすると、意を決したように腕を伸ばして柄を掴む。力強く掴みと掌に汗が滲む。心臓の鼓動が激しくなり、口の中が乾燥し出す。

……何も起こらない。同じ姿勢で暫く止まっていたが、黒い霧は発生せず、妖気の揺らぎも感じられない。

安心したように息を吐くと、黒魔羅を台から取り外し刀身を置かれていた鞘の中に仕舞う。金属同士がぶつかる耳触りの良い音が一度鳴ると、問題なく刀身は鞘の中に消えた。

「……………任務完了、か。巻き込んでしまいかたじけなかった、鎮外殿。まさかここまで大変な任務になるとは、想像もなかった。だが鎮外殿の力が無ければ脱出できなかっただろう。改めて礼を言わせてもらう。……ありがとう」

「……………つ!ん、あ、ああ……私も礼を言わせてもらう。影丸殿と共に城の中を探索したことで貴重な経験ができた」

「……………?そ、それは良かった。……ところで、拙者の里に来てくれぬか? 雄忍の里は忍びばかりでなく識者から知識も学んでいる。鎮外殿の知識を里の運営に役立させて頂きたいのだ。この城で慰み役をするよりは良い生活は保障する。……そ、それに……その……」

「……………はっはっはっは! 性生活のことだろう? 気になさるな。こう見えても修行僧の頃から絶倫で破戒僧を地で行ったものよ。喜んで一緒に過ごさせて貰おう。それに……」

そう楽しそうに笑うと、影丸の持つ黒魔羅に視線を落として若干表情を曇らせる。

「……………その中に『封じられた者』も気になるしのお」

「……………そうですか。黒魔羅は暫く里に保管する予定です。お好きに調べて下され」

「おお、それは嬉しい事だ。……では、帰りましょう。影丸殿の、あなた殿の故郷へ」

「承知。拙者が案内するからには、安心して下され。一度心に決めた相手をなあなあに扱うような、そこいらの下級雄忍とは違います故」

「はっはっは、それならば安心だ。では頼むよ、影丸『君』？」
「！く、君……！？君、ですか……」

「ん、不都合かな？君の様な若く筋骨隆々で性欲盛んな雄忍には、『殿』よりも『君』の方が似合うと思ったのだが……嫌ならば」

「い、いえ！そのようなことはありませぬぞ！……た、ただ驚いたというか……寧ろ、嬉しかった
というか……まるで師匠か、叔父のような感覚ですな」

「そうか！それなら良かった。では頼むぞ、影丸君」

「承知！」

影丸は笑顔を浮かべた鎮外の体をいたわるように背中に乗せると、落とさないようにしっかりと両足を掴む。

そして、黒魔羅の柄を落とさないようにしっかりと口に咥えようと、下層の窓から一気に外に飛び降りた。

全裸のまま大魔羅城の屋根を飛び移りながら地上へと向かう。裸足であろうと全裸であろうと影丸には関係ない。雄忍の実力ならばこの程度朝飯前である。

ふと、月が上る夜空を見る。あれ程長い時間彷徨った感覚があるのに、実際には一晩の出来事だったのだろう。

余りに短く、だがあまりに濃い一晩の経験であった。

GOODEND『一晩の修羅場』

了

黒魔羅の迷宮

影丸は銀太の長い舌で顔を舐められて意識を取り戻した。心配そうに小声で鳴く銀太の顔と、薄暗い木造の天井が見える。背中は木張りの床で冷やされ、迷宮の中で酷使した筋肉の火照りを押さえてくれる。

「きゆうううう……きゆうううう……あうっ！ばうっ！わんっ！」

「んっ……お、ああ銀太か、無事で良かった。……どこも怪我はないか？」

嬉しそうに尻尾を振って甘えてくる銀太の首元に抱き付きながら、褒めるように頭を撫でる。毛皮の温かみが筋肉だけでなく心も癒し、生きて脱出できた実感を得る。

間違いなく、ここは黒魔羅が安置されていた小部屋だった。壁には銀太が強引に開けた大穴が残っており、安置された黒魔羅がああ時のまま鎮座している。

ただ、異なる点が二点あった。一点は黒魔羅からは全く妖気を感じられない点。微かに感じるというものでは無く、一切感じられない。意匠はそのままだが普通の刀へと変化していた。

そして、もう一点は影丸と銀太の他に一人、小部屋で胡坐をかいている者が居た事だった。

その全裸の雄は全身が鎧の様に硬く厚い筋肉に包まれており、その雄々しさを誇示するように胸板を小刻みに動かしていた。

日に焼けたように濃い褐色をした肌には鬱蒼と体毛が茂っており、濃い顎髭や胸毛、陰毛から延びる腹毛に腋毛が雄臭さを強調する。

反面、輝くほどに禿げ上がった頭が太く凛々しい眉毛とは正反対の存在感を放つ。

そして、股間には圧倒的な長さ太さを誇る魔羅と、巨大な睨丸が凄まじい雄々しさを鎮座していた。

「……魔人……いや、魔人『だった』者か？」

「ふんっ、気付いてたか。流石は聖獣の飼い主って所かねえ」

「聖獣……銀太か」

「本気を出した聖獣の咆哮はどんな邪悪な封印でも破壊する。我輩……あの刀を鍛えた鍛冶師の間性を閉じ込めた封印でもな。お陰で魔人として幾度の歳を重ねたか……。やはり魔人の力なんぞ借りるべきじゃなかったな」

「成程、魔人の力を借りて魔剣を作ったが、逆に魔人の新たな依代とされてしまったか。……馬鹿な野郎だ」

「うるせえ。誰にだって功名心ってモンがあんだよ。……惚れた殿様に魔剣を献上すりゃあ、我輩を重用鍛冶師にしてくれるって言われりゃあなあ」

立ち上がった元魔人の雄は肩幅も広く体格も大きい。魔人時には劣るが優に影丸を見下ろす程度には高い。影丸も立ち上がるが、目の前まで歩み寄った雄の顔を見上げると首が痛くなりそうだ。

「……まあ、感謝はしてやる。その……何だ。あ、有難うな」

「礼には及ばぬ。拙者は任務を果たしたまでの事」

「なんでい、冷てえな。それとも、コッチに礼をした方が嬉しいか」

雄は若干腰を引いて影丸の股に片腕を通すと、そのまま片足を持ち上げるように膝の裏を抱えた。突然片足を取られて体の均衡を失った影丸は、思わず雄の太い首に抱き付き胸板の谷間に顔を埋めてしまう。

もう片腕を影丸の腋に通しながら体を持ち上げると、体を上下に揺さ振り自分の顔面に届く高さまで登って抱き付く様に促す。

「……やっぱ、こっちの方が嬉しいみてえだな。もう魔羅が硬くなつてやがる」

「そ、それはお互い様だろう。お前だって硬い物が拙者に当たっているぞ」

「そりや人間に戻って初めての逢引だからな。……おい、銀太つつうたか！お前のご主人様の肛門、お前のと我輩のが同時に挿入できるまで舐めで解してやれ！」

「なっ……!? あ、あんな太いのと二本同時は無理……! ぎ、銀太止めるんだ! 銀太……」

「わふっわふっ、ぐるるるる……ジュルジュルジュルジュル……」

雄に命令されたからか、自身の意志か、銀太は片足を持ち上げられて拵げられた肛門に容赦なく舌を挿入した。長い舌が必要以上に奥まで突き進み、前立腺を扱きながら内壁を緩めていく。時折涎を補給するために抜き出せば腸液が溢れ出し、再度突き上げれば影丸の全身は大きく反応しながら快感に身震いする。

抱き付く力も自然と強くなり、雄が舌を付き出せば当たり前のように舌を重ね合わせる。そのまま唇を重ね合い、大きな音を立てて涎を注ぎ合い飲み合う。雄の丸い頭を両腕で抱きかかえる様に唇を押し当て、鼻息荒く食ふ。

「んっ！んふっんぶっんぶっんじゅぶうんっ！あふっおふっんはあああああつ！良い……気持ち良いっ！銀太あんっ拙者の中もつと濡らひへふれええっ！あ、あああああああああああああ
あああああんっ！！もっひよ奥まへ開いへふれえっ！二本……二本啜えたひいいっ！銀太とお
っ！魔人の巨大魔羅ぶつさひてぐりえええええ！！」

「んぶ、じゅぶ　ぶじゅ、じゅるるるる……。へ、へへへ、流石の乱れつぷりだな雄忍の影丸！もう先走りが瀆みてえだな。我輩のよりもどろどろ溢れてらあ！！おらっ！銀太もそろそろ中に挿れてやれよ！お前の飼い主と一緒に孕ませてやろうじやねえか！！」

「ばうっ!!ぐおおおんっ!ぐおおおおつ!!わおおおおおおおおおおんっ!!!」

銀太が勢い良く肛門から舌を抜く。肛門は銀太の執拗な舌攻めとこれまでの幾度となる攻めによって完全に締りを失い、内壁が完全に露出してしまふほど大きく口を開いていた。物欲しげに伸縮すれば腸液を涎の様に垂れ流し、抱えられていない片足の太腿伝いに床に滴る。

すると、銀太が思い切り前半身を持ち上げ影丸の頭上を越え、そのまま前足を雄の屈強な肩に置いた。爪を立てずに肉球の柔らかい面だけで肩を持ち、不安定な体を支える。

頭上から荒い鼻息が熱い息と共に聞こえ、大量の涎が雨の様に二人の頭上に滴る。

「はうぐつ!!? はあはあはあはあはあはあがあああああんっ!?! あんあんあんあ
んあんあんあんああああああじいいいいいいつ!!!」

[illegible]

影丸は鎮外の揺さ振りで意識を取り戻した。心配そうに声をかける鎮外の顔と、薄暗い木造の天井が見える。背中は木張りの床で冷やされ、迷宮の中で酷使した筋肉の火照りを押さえてくれる。

「おおつ、影丸殿!! 目を覚ましたか! 良かった良かった」

「んっ……お、ああ鎮外殿か、そちらも無事で良かった。……どこも怪我はないですか?」

「ええ、私は特に。ただ、何点か問題が……」

そう悟ったように呟きながら、鎮外は小部屋の一点を凝視する。

間違いなく、ここは黒魔羅が安置されていた小部屋だった。安置された黒魔羅があの時そのまま同じ状態で鎮座している。

しかし、鎮外の視線の先にある黒魔羅からは全く妖気が感じられない。微かに感じるというものは無く、一切感じられない。意匠はそのままだが普通の刀へと変化していた。

「そして、それ以上に問題……と言いますか、解決した点がありませんな」

鎮外が更に視線を変える。影丸もそれに釣られて視線を変える。影丸と銀太の他に一人、小部屋で胡坐をかいている者が居る。

その全裸の雄は全身が鎧の様に硬く厚い筋肉に包まれており、その雄々しさを誇示するように胸板を小刻みに動かしていた。

日に焼けたように濃い褐色をした肌には鬱蒼と体毛が茂っており、濃い顎髭や胸毛、陰毛から延びる腹毛に腋毛が雄臭さを強調する。

反面、輝くほどに禿げ上がった頭が太く凛々しい眉毛とは正反対の存在感を放つ。

そして、股間には圧倒的な長さ太さを誇る魔羅と、巨大な睨丸が凄まじい雄々しきで鎮座していた。

「……魔人……いや、魔人『だった』者か?」

「ふんっ、気付いてたか。流石はあの封印を破壊した奴らだ」

「封印と言うと……鎮外殿が破壊したあの方陣か」

「ああそうだ。まさか人の身であれを破壊するとは。我輩……あの刀を鍛えた鍛冶師の人間性を閉じ込めた封印をな。お陰で魔人として幾度の歳を重ねたか……。やはり魔人の力なんぞ借りるべきじゃなかったな」

「成程、魔人の力を借りて魔剣を作ったが、逆に魔人の新たな依代とされてしまったか。……馬鹿な野郎だ」

「全くですな。魔人は日々新たな力を蓄えるための依代を探して居る。力のない人間があれば、都合よい餌としてしまう」

「うるせえ。誰にだって功名心ってモンがあんだよ。……惚れた殿様に魔剣を献上すりゃあ、我輩を重用鍛冶師にしてくれるって言われりゃあなあ」

立ち上がった元魔人の雄は肩幅も広く体格も大きい。魔人時には劣るが優に影丸を見下ろす程度には高い。影丸も立ち上がるが、目の前まで歩み寄った雄の顔を見上げると首が痛くなりそうだ。

「……まあ、感謝はしてやる。その……何だ。あ、有難うな」

「礼には及ばぬ。拙者は任務を果たしたまでの事」

「私にしてもそうですよ。あんな封印を見つけたら、破壊するのが僧の務めですからねえ」

「なんでい、冷てえな。それとも、コツチに礼をした方が嬉しいか」

雄は若干腰を引いて影丸の股に片腕を通すと、そのまま片足を持ち上げるように膝の裏を抱えた。突然片足を取られて体の均衡を失った影丸は、思わず雄の太い首に抱き付き胸板の谷間に顔を埋めてしまう。

もう片腕を影丸の腋に通しながら体を持ち上げると、体を上下に揺さ振り自分の顔面に届く高さまで登って抱き付く様に促す。

小部屋の中で抱き合った屈強で雄々しい二人の雄。ならば、やることは一つである。

「……やっぱり、こっちの方が嬉しいみてえだな。もう魔羅が硬くなつてやがる」

「そ、それはお互い様だろう。お前だって硬い物が拙者に当たっているぞ」

「そりや人間に戻って初めての逢引だからな。んっ……ふごっむぐっ……じゅるるるるる!!」

「なっ……!? あぶっほぶっ! じゅぶじゅぶじゅぶ……んっはっほふっ! ……ん、んん……」

雄が無理矢理影丸の唇を奪い、舌を挿じ込み歯の一本一本を舐め回す。同時に顔全体を舐め回しては影丸を興奮させ、誘う様に舌を突き出す。

誘いに乗った影丸は強い力で抱き付き、雄の濡れた舌に当たり前の様に舌を重ね合わせる。そのまま唇を重ね合い、大きな音を立てて涎を注ぎ合い飲み合う。雄の丸い頭を両腕で抱きかかえる様に唇を押し当て、鼻息荒く貪る。

「おやおや、私を忘れて貰っては困りますなあ。……どうせなら二本同時に種付けしましょう。元魔人の魔羅と一緒に種付けできるとは、滅多に無い経験ですからねえ」

若干嬉しそうに呟きながら、鎮外は片足を持ち上げられて広げられた肛門に顔を埋める。既に腸液を漏らし疼き始めている肛門は想像以上に可愛らしく、淫乱である。

そのまま容赦なく舌を挿入した。舌は必要以上に奥まで突き進み、前立腺を舌先で転がしながら的確に内壁を緩めていく。時折涎を補給するために抜き出せば腸液が溢れ出し、再度突き上げれば影丸の全身は大きく反応しながら快感に身震いする。更に、大きく開かせるため鎮外は自分の手首から先を少しづつ慎重に肛門に挿じ込んだ。影丸の雄叫びが響き渡るが、それに反して順調に手首まで咥え込んでしまった。中で腕を回転させれば内壁が完全に広げられていき下腹部辺りまで腕が挿入されてしまう。腹筋が不自然に膨らんでしまい、強い息苦しさを感じてしまう。

だが、それも肛門内部から溢れ出す腸液を漏らす開放感と、雄として貪ってしまう壮絶な快感によって打ち消される。

「んっ! んふっんぶっんぶっんじゅぶうんっ!! あふっおふっんはあああああっ!! 良い……気持ち良いいっ!! 鎮外どのおんっ拙者の中もつと濡らひへふれええっ!! あ、ああああああああああああああああんっ!! もっひよ奥まへ開いへふれえっ!! 二本……二本咥えたひいっ!! 鎮外ど

「んぶ、じゅぶ、ぶじゅ、じゅるるる……。へ、へへつ、流石の乱れっぷりだな雄忍の影丸！もう先走りが瀧みてえだな。我輩のよりもどろどろ溢れてらあ！！おらっ！坊主さんもそろそろ中に挿れてやれよ！お前の相棒と一緒に孕ませてやろうじゃねえか！！」

「ほおっ……ほおっ……むほ!!!と、当然ですよ!私の魔羅と一緒に、影丸殿を極楽浄土に逝かせ
てあげましょうぞ!!!」

鎖外が勢い良く肛門から舌を抜く。肛門は鎖外の執拗な舌攻めとこれまでの幾度となる攻めによって完全に締りを失い、内壁が完全に露出してしまふほど大きく口を開いていた。物欲しげに伸縮すれば腸液を涎の様に垂れ流し、抱えられていない片足の太腿伝いに床に滴る。

「はうぐつ!!? はあはあはあはあはあはあがああああああああああんっ!?! あんあんあんあ
んあんあんあんあああああああいよいよいよいよ!!!」

四肢が不自然な形に硬直し、爪先は痙攣しながら扇状に広がる。見れば、筋肉を覆う様に大量の汗が滲み出では、妖艶な照りを放って雄々しさを強める。

見れば、鎮外の巨大な魔羅が肛門に深々と挿入されていた。立ち上がると同時に勢い良く挿入したのだろう。

既に鎮外に掘られた経験はあるが、あの時は影丸からの所謂誘い攻めであった。今回は雄による攻めも加わり肛門も限界を超えて緩み切っているのも、感度が影丸自身の思っている以上に敏感になっている。しかも鎮外が理性を捨てて腰を振るので腹筋の内部が掻き混ぜられるような不快感と快感が、大波の如く引いては勢い良く突撃してくる。

「何だ、もう挿れちまったのか。だったら我輩も早速……犯させて貰うぜ、影丸よおつ!!」

影丸の片足を引き千切れそうな程に更に高く持ち上げ、尚且つ肛門に掌を挿入して中から押し広げる。そして、既に大量の先走りですべて濡れてしまっている巨大な勃起魔羅を、性欲のまま一気に肛門の中へ突き上げた。

鎮外の魔羅の脈動と熱を裏筋に感じながら、緩みに緩んだ内壁を破る様に突き進む。緩んだとは言っても鎮外との二本挿しである。強い圧迫感が魔羅を搾る様に刺激して二人を恍惚の淵に投げ出す。

ぶじゅぶじゅと激しい水音が影丸の肛門から引つ切り無しに聞こえる。腹筋は中から突き上げられて何度も変形し、その度に苦しみと快感に満ちた喘ぎ声が漏れる。その喘ぎ声も雄が濃厚な接吻をするか背後から鎮外が接吻を求め舌を重ねれば恍惚の呻きに変わる。

「おっ！おっ！おっ！おっ！うほっ！ぐほっ！うひっ！ーば、坊主との二本挿しは結構キツイな。前立腺削ろうと思つても、こ、コツチの魔羅がゴリゴリ削れちま……ああつ！！んごおっ！！すんげええええよおおおおおっ！！ひ、久し振りの人間の体で感度が……あああああああああつ！！もつ逝く逝く逝つちまうぜえつ！！はひいっふひいっ種付けして孕まあああああああつ！！」

雄と鎮外の魔羅が激しく擦り合わされ、意外にも早く絶頂に達した。雄は齒を食い縛つて大量に種付けをした。前代未聞な多さの種汁が影丸の中に注がれて腹筋を達磨の様に丸く膨張させる。種汁で満ちた内壁に雄の粘り強い熱を与え、暴れる魔羅が細かい個所まで染み込ませる。

「はあああああああんつ!!! やああああああああんつ!!! いぐうううううううううううつ!!! ごわれぐうううううううううううつ!!! ぜっじやをだねづぽにじでぐれええええええ!! もつどながにだじではらまぜでええええええつええええええつ!!!」

乳首同士を擦り合っていた影丸自身と雄の厚い胸板の間を駆け上り、二人の顔を真つ白に汚した。直接鼻腔に注がれた種汁が卒倒しそうな雄臭さを感じさせ、舌を伸ばせば容易に雄の苦みを味わえる。

全身を駆け巡る衝撃と熱流、そしてむせ返る様な雄の空気に包まれながら、影丸は意識を失った。

数か月後……

「失礼するぞ。前に頼んだ拙者の刀、完成したか？」

「おうよ！わがは……俺の腕にかかりやこの程度すぐに完成するぜ。おら、これだ」

「うむ。……流石の腕だな。これなら鎮外殿のかける法術もかかりやすいだろう。毎度の良い仕事だな」

「へへっ！こつちだつて雄忍の里に良い工場拵えてもらつたんだ。相当の仕事しねえと鍛冶師の名譽に傷がついちまう」

「おーおー。しばらく前まで魔人だった奴とは思えない口ぶりだな」

「よせやい。今はもう文字通りの真人間にもどつたんだからよ。……で、今度はいつ休みだ？」

「ああ、もう今日は任務は無いな。明日は下級雄忍の出番だから、拙者の出番はないな。……もう肌恋しいのか？絶倫なのは変わらずか」

「お互い様だろ、影丸。……じゃ、今日の夜、工場の裏にあるわがは……じゃなくて！俺の屋敷でな。忘れるんじゃないぞ！」

「……命を掛け合つた奴の約束を忘れる程、拙者は衰えてないぞ。まあ、承知した。鎮外殿も連れて行く故、覚悟するが良いぞ」

「へへっ、そつちこそな」

BESTEND 【鍛冶師転生・僧衣伝】

了



鼻先を風が撫でる。高所らしい強風が轟音と共に吹き込んでくる。だが、意識が混濁している影丸の体を押し潰そうとしている物は一向に退く気配は無い。

圧迫される胸と腹に呼吸が徐々に苦しくなっていく。怪我の功名か意識が鮮明になっていく。

重い目蓋を静かに開けると、目の前が真つ白い世界に覆われていることに驚く。しかも声を上げると白い世界は蠢く様に動き、柔らかい毛皮の感触が温かみと共に鼻先を押さえる。

遂には鼻と口まで押えられてしまい、本格的に呼吸が困難になった。苦しげに手足を暴れさせると、体の上のしかかる毛皮の塊に触れる。それは呼吸をして体を動かし、心配そうに影丸の体を温めていたのだった。

「ん~~~~っ!!ん~~~~っ!!むぐ~~~~っ!!……っばあっ!はああはああはああはあああ!!!ぎ……銀、太……お、起きたから……拙者も起きたから……!もう退いてくれ……!!こ、このままでは潰れ……うぎぎぎぎ……」

[illegible]

「うづつ!? おごつ!? は、跳ねるな! 拙者の体の上で……げふうつ!?」

「きゅーっ!? きゃうきゃうきゃううううう……。わうわうわう」

影丸の声を通じたのか、耳と尻尾を下げてしょんぼりしながら銀太が体の上から退く。咳き込みながら状態を起こして周囲の様子を伺う。

その小部屋は見覚えのある場所であった。銀太が開けた壁の大穴、そこから吹き込む強風に差し込む月光。そして、壁の奥には黒魔羅が保管されていた台座がある。

唯一違う点は……

「わんわんあんつ」

銀太は咥え続けた『それ』を嬉しそうに影丸に差し出した。恐らく先に台座から持つてきたのだろう。

黒魔羅は以前と変わらぬ姿で柄を握られた。影丸が軽く空を斬っても何も起こらない。微かな妖気が感じられるだけで、黒い瘴気は発生する気配は無い。

影丸は立ち上がると、台座に残ったままの鞘を手に取り白銀の刀身を仕舞った。全身が漆黒の黒に艶めく魔剣をしつかりと手中に収めた。

「任務、完了。……銀太、お前も一緒に来るか？拙者と……」

「共に」と言い終わる前に銀太は影丸の体に甘えるように体を擦り付けた。そして、大穴に向かつて伏せをすると、振り返り視線を使って背中に乗る様に促す。

最早、大魔羅の城に未練は全くないようだ。寧ろ影丸の里に行けることにとても興奮しているようだ。大きな目が輝いているように見える。

「……よしつ、拙者が道案内をする。移動は任せただ、銀太！」
「わんっ!! あおおおおおおおおおんっ!!」

遠吠えと共に、銀色の影が凄まじい勢いで大魔羅城の外壁を駆け下りていく。まるで隆盛の様な美しさで風を切り、背中に乗せた影丸を運んでいく。

改めてみると、青白い月光で照らされた大魔羅城はどこか妖しくも美しく見える。この中で日々阿鼻叫喚の雄肉地獄が行われているなど、傍目では分からないだろう。

黒魔羅を奪った以上、追手が現れるかもしれない。それは予想の範囲内である。ただ、それによって城内の雄欲が収まるかというと、それとはまた別問題なのだろう。

黒魔羅に封じられた魔人の影響力は、そう簡単に収まらないだろう。人間の本能に、煩悩と性欲が存在し続ける限りは……。

GOODEND『群獣に乗っ』

了

黒魔羅の迷宮

何とか自制心を保って先に進むと、大きな扉があった。門で開けられないように封印されている。だが、門はこちら側から落とされているので問題なく進めるだろう。だが、その門の棒は影丸たちの視線を奪うほどに精巧な意匠をしていた。

「な、何という巨大な魔羅……。こんな巨大な張り型、流石の拙者でも根元まで挿入できるかどうか……むむうっ……！」

まるで丸太の様に太く長く重い張り型が、扉の開け閉めを封じていた。皮の皺から亀頭のエラの裏側、実際に開けられている鈴口や中に見える内壁まで、実に細かい個所まで作り込まれている。実用品だけでは芸術品としても値打ちがありそうだ。

この大きさの張り型を使いこなせる雄が居るのかどうかは分からないが、この迷宮には相応しい物ではあるだろう。

「……………持っていくか。何の役立つかは分からぬが、持っていこう。恐らく……いや、必ずや何かの役に立つ!!」

若干興奮した様子の影丸は張り型を扉から外すと、そのまま扉をゆっくりと開け放った。無論、というか何というか、影丸の魔羅は徐々に硬度を増していたのだった。

(………時間に余裕があれば、実際に使ってみたいものだ……雄忍として!)

【大きな張り型】を入手しました。

・扉を抜ける…28

迷宮の魔羅

ああんっあああつあ
んんんんんんんい
に自らの卵を……おほ

ああんっあああつあ
んんんんんんんい
に自らの卵を……おほ

ああんっあああつあ
んんんんんんんい
に自らの卵を……おほ

は体を高くまで持ち上げて、影丸が駆け付けようとした触手を、いきなり底まで一気に触手を挿

は体を高くまで持ち上げて、影丸が駆け付けようとした触手を、いきなり底まで一気に触手を挿

は体を高くまで持ち上げて、影丸が駆け付けようとした触手を、いきなり底まで一気に触手を挿

全身の脂肪を引く張る

いのか、それとも目前

全身の脂肪を引く張る

いのか、それとも目前

全身の脂肪を引く張る

いのか、それとも目前

以上の圧迫感が与え、
たのは、触手の卵であ

以上の圧迫感が与え、
たのは、触手の卵であ

まゐる。どのおつ！わ
下されえつ！あつ！が
くつ！」

まゐる。どのおつ！わ
下されえつ！あつ！が
くつ！」

まゐる。どのおつ！わ
下されえつ！あつ！が
くつ！」

まゐる。どのおつ！わ
下されえつ！あつ！が
くつ！」

い
で床の中に消えて行
くと、鎮外は俯せの

い
で床の中に消えて行
くと、鎮外は俯せの

「か、影丸どのっ！は、早く卵を出して下され……っ！！このまま孵化したら大変なことに……。も、私の肛門を犯し尽すように荒い指捌きで……早く出してくだされえええええっ！！腹の中が抉られるようで……あ、あああああんっ！で、出ますっ！！」

影丸に頼む必要も無く、魔羅で緩み切った肛門は勢い良く卵を吐き出した。肛門が何度も伸縮し何度も卵を吐き出せば、粘液と腸液の混合液が滝の様に零れ出る。濃い陰毛や尻毛、毛深い睾丸と産卵の光景は余りに似合わないが、鎮外の野太くも艶めいた喘ぎ声と合わさって影丸の興奮を強める。

鼻息が荒くなり我慢が効かなくなると、影丸は肛門に指を突っ込んで中から肛門を押し広げる、同時に空いた片腕で自分の魔羅を扱い射精の準備をする。

そして、卵の残りが少なくなつたと見るや、突撃するように魔羅を肛門に挿入した。そして。背後から抱き付く様に腹を抱えると、卵が出やすいように強く圧迫する。

「鎮外殿っ！拙者の！拙者の漏らす種汁で奥まで洗って差し上げますっ！！思うが儘に力んで！力んで拙者の種汁と共に卵を出して下され！！」

「おぶっ！か、かげえ！かげまるうううっ！！はぶうはぶうなぎううううっ！！ふ……んぐ……んぎっ……ああっ！んんんんんんんんんんんんっ！！」

「はあっはあっはあっ逝く逝く逝く逝くうっ！！種汁中に出るぞおおおおおっ！！」

大量で濃厚な影丸の種汁が鎮外の体内に獅子ぎこまれる。それに追いやられるように卵が肛門周辺に移動する。

射精が止まらないままの魔羅を引き抜けば、盛り場のような凄まじい雄臭さと熱気が肛門から卵と共に噴出された。まるで潮吹く様に種汁を漏らせば、その中から流れ出されるように幾つもの卵が肛門の肉を伸ばしつっ吐き出され、周囲に転がる。

影丸の魔羅も道半ばだったように射精を繰り返し、鎮外の真っ赤に腫れた豊満な尻を肛門ごと白く汚していく。

まるで鎮外を調教しているような錯覚に一瞬陥った影丸も、影丸に激しく調教されたように感じた鎮外も、新たな快楽を得た満足感に満ちていた。

その満足感ゆえか、卵が全て鎮外から吐き出された後も、二人は暫く自慰行為を続けたのだった。

・近くの扉を抜ける…55

・この妖しい廊下を進む…58

魔羅の逆

影丸が振り返ると、そこには天井を突き破らん限りの巨人が姿を現していた。足元を見れば、巨人は床の一部が盛り上がったような形で現れたのが確認できる。

そして、突然の奇襲に逃げ遅れた銀太が巨人の両腕で拘束されてしまっていた。銀太程の巨体でも巨人から見れば子犬の様に思えてしまうだろう。

低い声で鳴き尻尾を立てて威嚇しながら必死で巨人を攻撃しようとするが、下半身側を巨人に見せるような状態で体を拘束されているので、爪は空を斬るしかない。

「がうつがうつ！がるるるるるるるるるるるっ！ぐおおおおがおおおおおおおおんんっ!!!」
「銀太!? 待ってろ今助けるぞ!」

影丸は急いで駆け寄り銀太の体を巨人から引き離そうとするが、余りの力にビクともせず膝を着いてしまう。巨人を倒そうにも武器は手持ちに無く、巨人の弱そうな箇所を手当たり次第に殴る蹴るをするが、全く聞いてない。

巨人はそんな影丸を一切気にせず、更に銀太を自身の間近にまで引き寄せる。尻尾が立ち剥き出しになった肛門が直接触れる様に引き寄せると、深呼吸をするように大きく背中を反らせて天を仰いだ。

次の瞬間、それまで激しく暴れていた銀太の動きが止まった。そして徐々に全身が痙攣し始めると泣くような声で四肢だけを暴れさせた。

良く見ると、銀太の魔羅は徐々にだが勃起し始めており、巨人が体を揺すれば揺する程長く硬くなっていく。ついには失禁したように先走りを漏らし始めてしまう。

更によく見れば、銀太の肛門に嵌じ込むように巨人の下腹部が挿入されていき、それを勃起した魔羅の様に太く長く硬化させて犯していたのだ。自身の巨根で雄を犯した経験はあるが、自分以上の巨根で痛い程に肛門を全開にされて犯されるのは初めてであった。

巨人が抑揚のある体で激しく銀太の肛門を突き上げれば、子犬の様な甲高い鳴き声で喘ぎながら先走りを漏らす。前立腺を荒々しい動きで削りながら奥底を擦れば、抵抗していた銀太の表情も大魔羅城の一員らしい恍惚の表情へと変化する。

「きやうううんっ! きやううううんっ! きやううううううううううんっ!!!」
「はあ……はあ……はあ……せ、拙者は、なんぞ淫乱な雄忍なのだ!銀太の……狼の……凌辱場面で……っう! はあ……はあ……はうう……」
「……興奮して……勃起、してしまうなんて……!!」

銀太の野性味を失った妖艶な乱れ様を凝視しながら、影丸は一心不乱に自慰行為を行っていた。そのまま銀太に歩み寄ると、舌をだらしなく垂らして涎を漏らす大きな口に魔羅を挿入した。影丸が何も言わずとも銀太はそれを愛撫するように長い舌で舐め回す。決して牙を立てず注ぎ込まれる種汁を飲み干しながら、影丸の恍惚の表情に酔いしれる。

人間以上に利く鼻腔には、影丸の種汁から直接放たれた雄臭が針で刺すような強さを持って広がった。舌で感じる苦みも人間以上に濃厚に感じまるで催淫剤でも打たれたように全身から力が抜け、代わりに穴と言う穴から体液が溢れ出し、逆に注ぎ込まれる。

そして、前後の口から何度となく生臭い種汁を注ぎ込まれて腹が膨張した頃、巨人が一際強い突き上げを繰り出した。同時にここ一番の量と熱を持った種汁を銀太の中に注ぎこんだ。

押し出されるように銀太も全身を痙攣させながら射精し、顔面は口から抜かれた影丸の魔羅から噴き出た種汁で白く汚した。

「ひやうひやふひゅうううううつ!!!ぎやおおおおおおおおおおおお……!!!」

最後にそう大きく遠吠えを上げると、銀太は全身を種汁に沈めながら倒れ込んだ。その表情は恍惚を湛えたままで、肛門と口からは他人の種汁が、魔羅からは自身の種汁が噴き出ているままであった。

巨人も満足したように床に沈みながら姿を消してしまい、後には銀太と自慰行為を継続している影丸だけが残された。

溢れる種汁と必死に戦いながら快感に身を委ねる影丸は、若干眉を顰めながら呟いた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……。す、済まないな。銀太……」

この一人と一体が再び活動できるまでには、まだまだ時間がかかるのだった。

- ・ 近くの扉に入る……
- ・ この廊下を進む……

魔羅の迷宮